

西村天囚没後 100 年記念シンポジウム

講 演 録



大礼服姿の「西村天囚」(西村貞則氏所蔵)

令和 7 年 (2025) 2 月

西之表市企画課

はじめに

令和6年(2024)は、西之表市出身の偉人である「西村天因」が没してから、100年の節目となりました。そこで、西之表市では、「西村天因没後100年記念事業」として、以下の3つの事業を行いました。

1. 企画展の開催

「種子島が生んだ偉人 一よみがえる資料と精神」と題し、令和6年7月13日(土)から9月15日(日)までの期間、種子島開発総合センター「鉄砲館」において企画展を開催しました。西村天因が執筆した書籍やゆかりの品、写真等を展示しました。また、西村天因が「懷徳堂」の再建に尽力したことから、大阪大学総合学術博物館より代表的な資料を借用し、特別展示しました。

2. 石碑解説小冊子『石碑に学ぶ種子島の歴史』の刊行

西村天因が撰文した石碑についての小冊子『石碑に学ぶ種子島の歴史』を、令和6年7月に刊行しました。「鉄砲伝来紀功碑」「豊山前田先生紀徳碑」「賢母遺蹟碑」「横綱西ノ海顕彰碑」を取り上げ、原文、書き下し文、現代語訳、解説を交えた作品となっております。

著者：湯浅 邦弘(大阪大学名誉教授)、竹田 健二(島根大学教授)

3. シンポジウムの開催

令和6年11月23日(土)にシンポジウムを開催しました。第1部では「漢学者西村天因と横綱西ノ海 二人をつないだ「孝」の思い」と題し、湯浅邦弘氏(大阪大学名誉教授)に講演いただきました。第2部では「西村天因を語ろう 一次の100年のために」と題し、湯浅氏には引き続き進行をしていただきながら、パネラーとして陶徳氏(関西大学名誉教授)、竹田健二氏(島根大学教授)、町泉寿郎氏(二松学舎大学教授)、六車楓氏(立命館大学専門研究員)にも加わっていただき、パネルディスカッションを行いました。

本書は、「西村天因没後100年記念シンポジウム」の講演録です。当日来場できなかった皆さまも、ぜひ本書を読んでいただき、郷土の偉人「西村天因」の思想に触れていただきたいと思います。

「西村天因没後100年記念事業」の実施にあたりましては、企画段階から開催に至るまで、当主の「西村貞則」様には多大なるご尽力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

令和7年(2025年)2月
西之表市企画課

西村天因とは

西村天因は近代日本を代表する漢学者・ジャーナリストです。本名は時彦、号は天因または碩園。現在「鉄砲館」が建っているこの場所で、慶応元年（1865年）に生まれました。天因は早くに父を亡くし、郷里の儒者前田豊山に学んだ後に上京して東京大学古典講習科に入学。22歳で社会風刺小説『屑屋の籠』を出版し、一躍文名を上げました。24歳で大阪朝日新聞社に入り、後に主筆となります。朝日新聞の有名コラムとして120年続いている「天声人語」は天因が命名したものです。44歳の時には特派員として世界一周旅行にも参加しています。

大阪在住中に天因が最も力を入れたのは、漢学塾「懷徳堂」の顕彰と再建でした。大正5年（1916）からはその教壇に立ち、また京都帝国大学の講師も務めました。さらに大正10年からは宮内省御用掛に任命され、皇室関係の詔書を起草するなど活躍しますが、大正13年（1924）に60歳で亡くなりました。天因の旧蔵書は、再建された懷徳堂を經由して、戦後大阪大学に寄贈され「碩園記念文庫」として収められています。

西村天因に関する年表

| | |
|-------------|---------------------------|
| 天文11年（1543） | 種子島南端の門倉岬に異国船漂着。鉄砲伝来。 |
| 慶長11年（1606） | 文之玄昌『鉄砲記』成立。 |
| 天保2年（1831） | 前田豊山生まれる。 |
| 慶応元年（1865） | 西村天因生まれる。 |
| 明治5年（1872） | 学制発布。 |
| 明治10年（1877） | 西南戦争。 |
| 明治13年（1880） | 牧瀬休八（後の横綱西ノ海）生まれる。 |
| 明治16年（1883） | 西村天因、東京大学古典講習科入学。 |
| 明治23年（1890） | 西村天因、大阪朝日新聞社編集局員となる。 |
| 明治33年（1900） | 種子島守時、男爵に叙せられる。 |
| 明治35年（1902） | 「賢母遺蹟碑」建立。 |
| 明治36年（1903） | 前田豊山、藍綬褒章受章。 |
| 明治37年（1904） | 西村天因の命名によるコラム「天声人語」の連載開始。 |
| 明治43年（1910） | 西村天因、「世界一周会」に特派員として参加。 |
| 大正2年（1913） | 前田豊山死去。 |
| 大正5年（1916） | 西ノ海、横綱に昇進。大阪学問所「懷徳堂」再建。 |
| 大正6年（1917） | 西村天因「力士西海報恩碑」を撰文。 |
| 大正8年（1919） | 九段相撲場（靖国神社）において横綱西ノ海引退相撲。 |
| 大正9年（1920） | 西村天因、文学博士号を授与される。 |
| 大正10年（1921） | 「鉄砲伝来紀功碑」建立。 |
| 大正12年（1923） | 「豊山前田先生紀徳碑」建立。 |
| 大正13年（1924） | 西村天因死去。 |
| 昭和16年（1941） | 「西村天因先生誕生之地」石碑建立。 |
| 昭和31年（1956） | 「横綱西ノ海顕彰碑」建立。 |
| 昭和58年（1983） | 種子島開発総合センター（鉄砲館）建設。 |
| 令和6年（2024） | 西村天因没後百年。 |

西村天因没後 100 年記念シンポジウム

開催日時：令和 6 年（2024）11 月 23 日（土） 13：30～16：30

開催場所：西之表市民会館 ホール

目 次

| | |
|-----------------------------|----|
| はじめに | 1 |
| 西村天因とは | 2 |
| 目次 | 3 |
| 西之表市長あいさつ | 5 |
| 第一部 講演 | 6 |
| 漢学者西村天因と横綱西ノ海 二人をつないだ「孝」の思い | |
| 講演者：湯浅 邦弘（大阪大学名誉教授） | |
| はじめに | 6 |
| 一、100 年の歴史 | 6 |
| 60 年か 100 年か | |
| 西村天因と大阪大学 | |
| 二、西村天因と西ノ海 | 8 |
| 相撲の歴史 | |
| 西ノ海の化粧まわしと日典寺の顕彰碑 | |
| 堂々たる体格の天因 | |
| 横綱西ノ海の土俵入り | |
| 土俵の柱と陰陽五行説 | |
| 靖国神社相撲場での引退相撲 | |
| 三、碑文に込めた思い | 15 |
| 石碑建立の難しさ | |
| 「孝」が二人をつないだ | |
| 「仁」や「孝」の落とし穴 | |
| 「薩摩武士に漢学を注入したもの」が天因 | |

| | |
|---------------------------------|----|
| 第二部 パネルディスカッション | 19 |
| 西村天因を語ろう 次の100年のために | |
| パネラー：陶徳民（関西大学名誉教授）、竹田健二（島根大学教授） | |
| 町泉寿郎（二松学舎大学教授）、六車楓（立命館大学専門研究員） | |
| 司 会：湯浅邦弘（大阪大学名誉教授） | |
| はじめに | 19 |
| 一、パネラーと種子島・西村天因との関わり | 20 |
| 二、近代文化史における西村天因 | 23 |
| 天因が学んだ東京大学古典講習科 | |
| 東京から関西へ | |
| 日中文化交流史における天因 | |
| 『楚辞』と天因 | |
| 天因が尽力した懷徳堂の再建 | |
| 発見された新資料 | |
| 天因が撰文した碑文 | |
| 漢文を読むための工夫「評点」 | |
| 三、西村天因研究の可能性 | 36 |
| 資料修復と継承の必要性 | |
| 漢文教育への提言 | |
| 近代史における天因の活躍 | |
| 模範にすべき天因の視野と見識 | |
| 郷里を知ることの大切さ | |
| シンポジウムチラシ | 43 |
| シンポジウム来場者用パンフレット | 44 |
| シンポジウム配布資料（第1部） | 46 |
| シンポジウム配布資料（第2部） | 47 |

市長あいさつ

皆さんこんにちは。市長の八板です。本日はお忙しい中、西村天因没後100年記念シンポジウムに多数ご来場いただき、心からお礼申し上げます。

西村天因は、日本の歴史に深く刻まれた偉大な人物であり、西之表市の出身であります。彼の功績は、時を超え、我々の世代にも大きな影響を与え続けています。

本日は、天因の功績を称え、彼の思想に触れ、また、私たちの未来を見据えた議論やアイデアを共有していく、そのようなシンポジウムにしたいと思っております。



天因の精神を胸に刻み、彼と同じ情熱と決意を持ち、この街をより繁栄させるために努力することこそが、真の敬意の表れだと信じています。

本日のシンポジウムのために、大変お忙しい中、5名の先生方にご来島いただいております。皆さんの本日の講演、パネルディスカッションは、西之表市にとって非常に大きな財産になると思っております。最後までよろしく申し上げます

最後に、このシンポジウムが皆さんにとって有意義な時間となることを願いまして、簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

令和6年11月23日
西之表市長 八板 俊輔

漢学者西村天囚と横綱西ノ海 二人をつないだ「孝」の思い

湯浅邦弘

はじめに

皆様こんにちは。ご紹介いただきました大阪大学名誉教授の湯浅と申します。

「西村天囚（図1）没後100年」という大きな節目の年に当たり、今日の講演の機会を与えていただきました。本当にありがとうございます。

私の専門は中国の古典、いわゆる漢文です。古代中国から近現代の日本の漢文まで広く勉強しているのですが、その中で私が今最も注目しているのは、種子島出身の西村天囚先生です。明治・大正時代を代表する漢学者・ジャーナリストなのですが、まだまだ十分な評価を得ていない、きちんと研究がなされていない、そういう人ではないかと思えます。

今日はその人物像と、歴史的な意義を明らかにするために、2部構成でお送りしたいと思っています。第1部は私の講演で、これはいわば前座です。第2部、これがメインです。この後の第2部は、私を含めて5人の研究者が登壇しまして、様々な角度からお話をしますので、1部・2部通してどうかお楽しみにしていただければと思います。

一、100年の歴史

60年か100年か

ところで、没後100年という節目なのですが、100年も経ちますと歴史的な人物ということになります。私の正直な気持ちとしては、西村天囚「先生」と敬称をつけてお話ししたいのですが、歴史的な人物でありますので、客観的に評価するために、大変失礼ではありますが敬称は抜きにしてお話させていただきます。

100年を単位に物事や人生を考えるとというのは、皆さんいつ頃からあると思われませんか。これは調べてみないとわかりませんが、そんなに昔からあったことじゃないと思います。かつては大きな区切りとしては、100年ではなく、60年ではないかと思えます。

年齢で言いますと、60年を還暦と申します。これは当時の人々が、物事の順番や数を数えるとき



図1 西村天囚（西村貞則氏所蔵）

に、十干十二支で数えたためです。十干の干というのは甲乙丙丁で始まる10個。それから支というのは子丑寅から始まる12、これを組み合わせると60通りになるわけですね。だからそれが一巡するので、60を還暦というわけです。今は大変長寿の方もいらっしゃいますが、当時の平均寿命は今よりずっと短かったので、60年も過ごせば大変長生きだったと思います。それで60というのが区切りとしては大きかったんじゃないかなと思います。

では、100年で考えるようになったというのはどういうことなのかといいますと、恐らく近代になって西洋から西暦の考え方が入って来て、10とか100とかの区切りになったんじゃないかなと思います。加えて、現代では実際に100歳近く、また100歳を超えるような長寿の方も出てきましたので、100年という区切りが重んじられてきたんじゃないかなと思います。「人生100年」という言い方は古くからありましたが、それは非常に漠然とした言い方で、ちょうど100年という意味ではなかったと思います。それが近代になってから100年という括りができたと思います。

天因が亡くなったのは、今から100年前の大正13年(1924)です。去年は大正12年の関東大震災から100年ということで大変注目され、いろいろテレビの特番が組まれたりしました。それから1年後の大正13年に天因は60歳で亡くなっています。

大正13年というのを干支で言いますと「甲子」という年です。甲子というのは十干十二支の最初の組み合わせです。甲乙丙丁の甲と、子丑寅の子を組み合わせた年です。そこでこの甲と子を合わせた干支として、大正13年に兵庫県西宮にできた野球場が甲子園球場と名付けられました。そのようにかつては干支を使っていろいろ年数を表現したり、建物の名前をつけたりしていました。ですから、今年は大正13年没後100年でもあります。甲子園球場誕生100年でもあります。

西村天因と大阪大学

天因が生まれたのは幕末の慶応元年(1865)です。慶応は江戸の最後の年号です。天因が3歳のとき、お父さんを亡くしています。家族の温かい愛情に育まれて、また、この島の当時の大変有名な学者だった前田豊山先生の指導を受けて成長します。榕城小学校の校庭に前田豊山先生を顕彰する石碑が建っています。あの石碑の漢文を書いたのは西村天因です。榕城小学校の石碑は何度もご覧になっていると思いますが、もう一度よくご覧になってください。弟子であった西村天因が漢文を書いております。

そして天因は16歳のとき、一念発起して東京に出ます。そこで当時の東京大学古典講習科というところで学びます。この古典講習科については第2部のパネルディスカッションの中でも詳しくお話いたしますので、ここで話すことは避けます。

その後、天因は東京から大阪に移ってきます。これにはいろんな理由があったんですが、一つに天因は大変お酒が好きで、ちょっとやんちゃなところがありました。それで東京の恩師だった先生に出入りを禁止されるということもありました。それで東京にいられなくなったわけではないですが、天

因はおおらかな性格ですので、東京というのはやはり官僚的なところがあり、肌に合わなかったようで、大阪に来ました。それで当時の大阪朝日新聞に入って、そこで記者となって大活躍をされるわけです。私はつい先日、朝日新聞の方から取材を受けました。「天声人語」というコラムがありますが、あれは西村天因が命名したものです。「天声人語」というコラムが今年ちょうど120年になるという歴史があります。それについて取材を受けました。それくらい当時の朝日新聞で大活躍された方です。

天因は大阪に移ってすぐに大阪の歴史の勉強をします。そしてその成果を、当時の大阪朝日新聞に連載しています。その中で最も彼が関心を寄せたのが、江戸時代の大阪にあった漢学塾「懷徳堂」です。これは大阪大学の源流の一つとされています。大阪大学は比較的歴史が浅い大学ですが、緒方洪庵が作った「適塾」という蘭学塾と、「懷徳堂」という漢学塾の二つを源流にしています。この「懷徳堂」というのは幕末維新とともになくなってしまったんですが、是非これを顕彰して復興したいと天因は思いました。

「懷徳堂」というのは大変ユニークな学校で、江戸幕府が作ったものでもないし、大阪町奉行が作ったものでもない。大阪町人たちが作った学校で、非常に自由な学校でした。この「懷徳堂」についても第2部のパネルディスカッションの中で詳しくお話ししたいと思います。

この「懷徳堂」は江戸時代で一旦終わるんですが、天因の尽力によって大正5年(1916)に再建されます。この「懷徳堂」に由来する5万点もの資料が現在大阪大学懷徳堂文庫(図2)として伝わっています。私は学生の頃からこの資料について勉強し、その中で西村天因という人の名前を知りました。大変多くの資料を見て本当に感ずるところがありました。



図2 大阪大学図書館(懷徳堂文庫)

今からもう7年前になりますが、平成29年(2017)に現在の西村家の皆様が大阪大学を訪問してくださいまして、そのとき私がこの「懷徳堂」に由来する西村天因の旧蔵書をご案内するという大変貴重な経験をさせていただきました。それがきっかけで、現在に至るまでこちら種子島で文化財調査をさせていただいております。本当に歴史の偶然でした。西村さんが大阪大学を訪問して下さったおかげで、私と種子島とのご縁ができ、現在に至っております。

二、西村天因と西ノ海

それで、この5万点の資料をこれから紹介していきますと、日没までに間に合わないで、今日は残念ながらその詳しいお話は控えさせていただきます。その代わりというわけではないですが、皆さ

んにとって馴染みが深いであろう、西村天因と西ノ海の関係についてお話いたします。これは従来の研究者はほとんど注目していないことです。私も実を言いますと、これまであまりよく知らなかったのですが、この2人の関係について非常に面白いと面白く思っていることがありますので、今日はこれをメインにして、西村天因という人の一面についてお話をさせていただきます。

相撲の歴史

私は島根県の出雲の出身です。出雲というところは古代では一つの文化拠点だったようで、出雲大社という大変大きなお社があります。縁結びの神様ということで大変有名になっていまして、旧暦の10月、今年の場合は11月の第1週くらいですが、全国の神様が出雲に集まられます。そこで、この人とあの人を結びつけようという神様の会議が行われます。そして先週くらい、神々は帰って行かれました。出雲の人間はその間は静かにしていなくちゃいけないんです。神様の会議を妨げてはいけないので、カラオケに行って騒いだりしちゃいけないことになっています。それでこの11月に神様会議が行われて、全国の神様が出雲に来るのでなくなっちゃうわけです。そこで旧暦10月のことを神様がいない神無月と言うわけですが、出雲だけは神有月と言っています。

この出雲大社の境内に相撲場があります。それはなぜかといいますと、「野見宿禰」という人が昔いまして、その人は大変な力自慢でした。それで当時の都の奈良の地に招かれ、「当麻蹶速」という人と力比べをし、野見宿禰が勝ちます。これが相撲の始まりです。ですから、出雲というところは縁結びの神様で有名なんですが、もう一つ、相撲の起源にも実は関わっている土地柄です。

そして、九州はとにかく相撲が盛んな土地で、有名な力士がたくさん出ています。私が若い頃有名だった人に若島津さんという人がいまして、非常に精悍な顔立ちの強い大関でした。私が学生の頃、歌謡曲の時代からアイドルの時代へと変わっていましたが、人気タレント・アイドルの高田みづえさんが若島津さんと結婚されて、大変驚いたことがあります。今は十両で島津海さんが頑張っています。何とか頑張って大関、横綱になってほしいと思いますが、現時点では種子島出身で横綱まで上り詰めたのは西ノ海だけです。

先ほど市長からご紹介がありましたように、当時鹿児島島巡業があったときに、羽生さんの関係者が牧瀬休八さんを鹿児島に連れていき、それでスカウトされて相撲界に入られたそうです。種子島も相撲が盛んな土地で、西ノ海（牧瀬休八）も大変な力自慢だったそうです。

現在、西村さんのお宅には多くの天因関係の写真が残っています。アルバムに貼られて残っている貴重な写真を今日これから何枚か紹介しますが、全て西村家からお借りしてきたものをここに投影しております。

西ノ海の化粧まわしと日典寺の顕彰碑

西ノ海が結めている化粧まわし(図3)に注目してください。化粧まわしは十両からつけることができますが、西村さんのお宅のアルバムには「横綱西ノ海」というメモがありました。いつ付けられたメモかわかりませんが、ちょっと若い感じがします。ですから、この写真は横綱のときではなく、十両に昇進したときの記念だった可能性もあります。

とにかくこの化粧まわしを見てみると、三角形を三つ重ねたいわゆる三鱗さんりんの紋章です。これは代々種子島を治めておられた種子島氏の家紋です。江戸時代までは力士というのは各藩のお抱えでした。そして化粧まわしには、各藩の藩紋をつけていました。もちろん西ノ海にしても天因にしても、明治・大正時代のことでですから藩ではないんですが、まだそういう意識が強く残っていて、それで種子島氏から西ノ海に贈られた化粧まわしにこの三鱗の紋章がつけられていたと思います。

牧瀬さんは大変強い力士だったので、その後、関脇・大関と昇進して、ついに横綱になられるわけですが、その西ノ海を讃える石碑が皆さんもよくご存知の下西の日典寺にあります。その境内に「横綱西ノ海嘉次郎顕彰碑」という大変立派な石碑が立っています(図4)。実はだいが後になってからの昭和31年(1956)に当時の日本相撲協会の役員だった木村庄之助きむらむねすけが書いた碑文が付けられています。ですから、この石碑は天因さんとは実は関係ないんです。日本相撲協会が昭和になってから建てたものです。



図3 化粧まわしをつけた西ノ海
(西村貞則氏所蔵)



図4 日典寺の西ノ海顕彰碑

堂々たる体格の天因

次の写真です(図5)。これも西村さんのお宅にあった古い写真なんですが、撮影日時、場所はわかりませんが、おそらく東京に出て活躍していた種子島出身者の記念写真じゃないかと思えます。この後列中央に映っているのが西ノ海、後列左が天因、その前に座っておられるのが天因の奥様の幸子さんです。あとも全部種子島関係者です。ここで注目したいのは、西ノ海と天因の背丈があまり変わらないことです。西ノ海は堂々たる体格の力士で、身長が185センチあったそうです。天因も6尺を超えていた、つまり180センチあったと言われていました。ですからこの写真を見てもわかりますように、天因は非常に体格が良かったのです。おおらかな性格でカリスマ性を持っていたと言われていますが、その理由の一つは、こういう堂々たる体格にもあったんじゃないかなと思います。

今でこそ長身の方はたくさんいらっしゃいます。特にスポーツ選手では背の高い方がいらっしゃいますが、これは明治・大正時代の180センチです。ちょっと古い話で恐縮ですが、私が子供の頃、こういうカリスマ性を持ったスターと云えば、スポーツ界ではプロ野球の長嶋茂雄さん、歌謡界では石原裕次郎さんという映画・歌手のスターがいました。聞くところによると、長嶋茂雄さんと石原裕次郎さんは偶然身長が同じ178センチなんです。ですから天因はそれよりちょっと高いです。明治大正時代、いかに大きかったかということがよくわかります。多くの人を引きつける魅力があったんじゃないかと思います。

それでは、もう1枚見てみましょう(図6)。この写真も残念ながら場

所と日付はわかりませんが、西ノ海の婚礼のときの写真です。西ノ海は大関になって結婚しました。この写真の中央奥に座っているのが西ノ海です。媒酌人を務めたのは、その右に座っている当時最強と言われた横綱梅ヶ谷うめのたにです。横綱の媒酌で結婚されています。今、結婚披露宴というと、ホテルの宴会場のテーブルでというのが多いと思いますが、当時はこういう和室に膳を並べてという形式が多かったんじゃないでしょうか。この右側にも相撲関係者が何人かいるのがわかります。力士の名前は現時点ではわかりませんが、この辺りの情報をお持ちの方がおられましたら教えていただきたいと思います。



図5 西ノ海との記念写真(西村貞則氏所蔵)



図6 西ノ海婚礼(西村貞則氏所蔵)



図7 西ノ海土俵入り（西村貞則氏所蔵）

それからもう1枚（図7）、これはすごい写真です。横綱土俵入りの写真、立派な写真です。この写真もいつどこで撮影されたものがわかりませんでした。そこで私はこれだけは何とか調べをつけたということで、相撲の関係を探して回りました。まずは種子島じゃないか、鹿児島じゃないかと思いました。地方巡業に来たときの写真じゃないか、凱旋相撲じゃないかと思ったんですが、どうもこれは種子島じゃない、鹿児島でもないということがわかりました。

そこで相撲にゆかりのある例えば奈良とか出雲とかではないかと思いましたが、そうでもない。では、そもそも当時の力士がどこで相撲をとっていたのかということなんですが、実は明治40年前までは常設相撲場というのがまだないんです。お寺や神社の境内にその場所ごとに相撲場を仮設するんです。そこで巡業をしていました。だから雨が降ると何日でも休場になってしまうんです。今のよう15日制で優勝力士を決めるという制度はありませんでした。

これでは、あまりにひどいということで、ようやく明治時代の終わりごろに現在の両国橋のたもとに両国国技館ができます。すぐそばに回向院というお寺がありまして、その敷地内に国技館ができたんですが、残念ながらわずか数年後に大火災で焼けてしまったんです。西ノ海の引退土俵入りをする場所がないんです。それで日本相撲協会が、かつて巡業相撲をしていたお寺や神社などの候補地を探して、最後は靖国神社の境内、当時「九段相撲場」というふうに言ったそうですが、その相撲場で両国国技館が再建されるまでの3場所ほどやりました。そのときの土俵入りだったということがわかりました。私はそれを調べるために東京にも何度か足を運び、現在の両国国技館にも行きましたし、日本相撲協会の方にも会って取材してようやくそれが判明し、大正8年（1919）1月の写真であることがわかりました。

西ノ海は第25代横綱ですが、この写真が非常に面白いのは、右側の太刀持ちをしている人も横綱なんです。露払いの人も横綱なんです。当時の現役横綱3人が土俵入りを務めたという非常に珍しい写真です。今は土俵入りをすると、両脇には同門の力士が付き従うと思いますが、横綱が3人並ぶという光景はまずないです。そういう意味で非常に興味深い写真です。

それからこの写真で私が興味深いと思ったのは上の幕「水引幕」^{すゐひきまくら}と言いますが、この幕が現在の日本相撲協会の幕とは違うということなんです。今行われている九州場所は明日千秋楽ですが、どうかテレビをよく見てください。日本相撲協会のマークが、四方に張り巡らされた幕にそれぞれ2個ずつ付いていますが、いずれも二重の丸い輪の中に桜がかたどってあります。これが現在の日本相撲協会のマークです。ところが、このマークは違います。これも調べてようやくわかったんですが、下が桜、上が錨^{いかり}で、当時の海軍のシンボルマークなんです。日本は明治時代に日清戦争、日露戦争に勝利しました。そして相撲が国技だということで非常に重視されていきます。そういう中で陸軍や海軍も相撲を支援していきます。それで陸軍はシンボルマークだった桜の幕を寄贈しました。一方、海軍が「桜に錨」のシンボルマークを付けた幕を日本相撲協会に寄贈し、当時はそれを交代でつけていました。この写真は海軍のもので、有名な東郷平八郎さんが作って贈ったものです。九州にゆかりがあるからということなのでしょう。この日は海軍の水引幕が使われています。

土俵の柱と陰陽五行説

それからもう一つ。今の相撲と違うのは、4本の柱があることです。今は柱はありませんね。これは昭和の時代になって、テレビ放映が始まると柱が邪魔になってよく見えないということになりました。それで柱は撤去されて、現在は釣り屋根になっています。釣り屋根になって、柱の代わりに房が四つ垂れ下がっています。それは柱の名残です。

この左側を拡大してみると、柱が見えます。そして面白いのは、その柱を背にして土俵の上に審判が座っていることです。今は審判は土俵の下に審判長を含めて5名座っていますが、当時はこの柱を背にして土俵の上にはいたんです。しかし、今は大の里さんとか巨漢の力士がいますので、そういう力士が突っ込んできたら危ないんじゃないかなと思います。

この写真は残念ながらモノクロなんですけども、現在の房には色が付いていますので、それと同じだと推測されます。そうしますと、この左側の手前、正面から見て左の手前は青になります。現在の青房^{あおぶら}です。左の奥は赤です。それから反対の右側は手前が黒で奥が白になります。

なぜこんな色を付けているのかというと、これは古代中国以来の陰陽五行説という学説に基づいていて、色彩と方角には関係があると考えられていました。白は西を表します。反対の青は東を表します。ですから、現在の東^{ひがし}方力士はこの青房の方から入場してくるし、西方の力士は白房の方から入場してきます。この原則は古来変わらないということです。これが中国の陰陽五行説に基づく色彩と方角の関係です。思いがけないところで私の専門の古代中国の思想の話が出てきたんですが、その

ようなことになっています。

靖国神社相撲場での引退相撲

それから、さらに目をよく凝らしてみると、もっと面白いことがあります。西ノ海の足元を見てみますと、あるはずのものがありません。何かと言うと、両力士の前にあるはずの仕切り線がありません。今の土俵は両力士が仕切るとき、仕切り線のところに両手をつけてから立ち合いますが、その線がない。江戸時代と明治時代の途中まではそもそも仕切り線というのはなかったんです。だから力士がほとんど額を突き合わせるくらいの至近距離で仕切っていたそうなんです。それがだんだん力士も大型化していきますので、両力士を分けるものとして仕切り線が引かれ、間隔は初め60センチ、現在は90センチです。この仕切り線のところに必ず両手をつけてから仕切る、そういうルールになっています。

それからもう一つ現在と違うところがあります。ちょっと見えにくいと思いますが、土俵の円が二重になっています。当時は俵を二重に敷いて円を作っていました。これも昭和になってから内側の俵は撤去され、外側の俵一重の円になりました。ただ現在の土俵でも東西南北の1ヶ所ずつ少し外側にずれているところがあります。徳俵とくたわと言います。あれは土俵が昔は二重だったということの名残なのかもしれません。ですから西村さんのお宅にあったこの写真は、当時の相撲の様子、現在と異なる様子をいろいろ示している本当に貴重な写真です。

私は何とかこれだけは場所と日付を突き止めたいと思って各地を回ってようやく突き止めることができました。そう思ってよく見てみますと、お客さんは超満員ですが、天井がなく空いています。だからこれは仮設の相撲場だったということがわかったんです。場所はなんと靖国神社だったということです。靖国神社が選ばれた理由は、過去に巡業相撲をしていた実績があったことに加え、この相撲の土俵の周囲に石段か何かでスロープが付いているらしいんです。わざわざ棧敷席を組まなくても自然にこういう座席ができるという利点があったようです。

だからこの写真ではお客さんの顔がよく見えます。そしてこの写真では小さくて見えにくいですが、観客の姿を細かく見ていきますと非常に面白いことがわかって、男性は当時流行していたハンチング（鳥打帽）をかぶっている人が多いです。それから学生帽をかぶっている若い人もおりますし、女性の姿が結構あります。江戸時代までの相撲では、女性は千秋楽しか見ることができなかったそうなんです。今でも女性は土俵に上がれないそうですが、いろんなしきたりがあります。これは大正時代です。観客席は老若男女問わないということになったようで、そういうことがよくわかる写真です。

三、碑文に込めた思い

石碑建立の難しさ

これでお話を閉じますと、今日は相撲の話で終わったということになってしまいますので、いよいよここから本題です。西ノ海と天因はどうつながるのかということなのですが、日典寺の石碑は天因とは直接関係がない。あれは昭和31年に建てられたものなので、だいぶ後です。西ノ海が横綱に昇進したのは大正5年(1916)でした。その年に西ノ海が天因に石碑の碑文を書いてくださいと依頼し、天因はそれを漢文で書きました。残念ながら何らかの理由でその石碑は実際には建立されなかったようです。ですから、漢文は残っているのですが、その石碑は建っていません。

しかし皆さんよく考えてください。石碑を建てるというのは結構大変なことなんです。私は物書きの端くれなので、たまに本を書いて出版させていただくことがあるのですが、出版もなかなか大変です。まず出版するにふさわしい原稿が書けるかどうかということが大前提ですが、出版社の企画にならなければ本は出せません。ただ、出版社が刊行の決断をしてくれれば、編集や校正の苦労はあっても、出版は実現します。

ところが石碑の場合は、漢文ができたからといってすぐ建つわけではありません。まず碑文を刻むのに適当な大きな石を調達しなければならない。また、それを建てる適切な場所が必要です。さらに、その漢文を実際に石に掘る彫刻師、その原版となる漢字を書く書家。いろんな条件が揃わないと石碑は建ちません。

今日は種子島の方がほとんどだと思いますが、どうか皆さん種子島を誇りにしてください。この種子島には多くの石碑が残っています。単位面積あたりでは日本随一じゃないでしょうか。

例えば島の南端の門倉岬には、鉄砲伝来の石碑が建っていますが、あの碑文も西村天因が書きました。今日、入口で受け取られた方もいらっしやるかと思いますが、今年の記念事業に合わせて、『石碑に学ぶ種子島の歴史』(図8)という本を書かせていただきましたので、種子島に残る石碑の一端を味わっていただければと思います。残念ながら天因が書いた西ノ海の石碑は残っていませんが、幸いに漢文は残されているので、それを私は読んで小冊子の中にご紹介いたしました。今日はその中身を詳しくお話することは避けまして、結論だけを端的に皆さんにご紹介します。

令和6年7月に刊行しました。西之表市ホームページにPDFデータを掲載していますので、ぜひ一読ください。以下のQRコードから西之表市ホームページにアクセスできます。



図8 『石碑に学ぶ種子島の歴史』

「孝」が二人をつないだ

なぜ天因は西ノ海の依頼を快諾したのか。当時、天因は大変多忙でした。まだ大阪朝日新聞の現役でしたし、それから天因の尽力で「懷徳堂」が再建された年です。また、その年からは京都帝国大学にも漢文を教えるに行っています。そして、たくさん執筆依頼も来ていました。そういう中で、西ノ海の依頼を快諾したその思いは何だったのかということなのですが、端的に言うと、親孝行の「孝」という気持ちだったんです。「孝」というのは中国の古典に出てくる重要な道徳です。孔子も『論語』の中で「孝」についてたくさん述べていますし、また「孝」の道徳についてまとめた『孝経』という古典があるくらいです。

それで西ノ海は、横綱に昇進してすぐ種子島に凱旋します。ところが当時ご両親はもう亡くなっていたそうです。それで自分の雄姿を親に見せることができなかつた。つまり、生前の親の恩に報いることができなかつたという思いがあったのです。それでせめてもの気持ちということで、自身の親を讃える、つまり自分が横綱になれたのは親のおかげであるという思いを込めた碑文を天因に頼んだそうです。天因はそれに大変感動したわけです。それは、古代中国以来大切にされてきた道徳だったからというだけではないように思います。

天因は3歳のときにお父様を亡くしています。その後、天因は立派に成長しましたが、その姿をお父さんに見せることはできなかつた。そういう自分の境遇と西ノ海の境遇が重なったんじゃないかと思うんです。生前の親の恩に充分報いることができなかつた。その思いは天因にもよくわかるということで、西ノ海の依頼を快諾して漢文を書いたんじゃないかと思います。そして天因が書いた漢文は「力士西ノ海報恩碑」という題名でした(図9)。親の恩に報いるというタイトルとなっています。また天因はそれに朱書きで訂正を入れて、「追孝報恩碑」とし、その意味をさらに強調しています。

その最後の漢文を書き下し文で紹介すると、天因が「怪力は得やすく孝は得難し」と結んでいます。怪力、力自慢の人は得られるでしょう。西ノ海ほどの力自慢の人はそれほど多くなかつたと思いますが、力士の中には怪力の人はいる。だから、怪力は得やすいと。しかし、本当の「孝」の気持ち、これはなかなか得られるものではない。西ノ海の気持ちはまさに「孝」の気持ちであるというのが天因の結びの言葉です。両者をつないだものを一言で集約すれば、それは「孝」ということだったのではないかと。そして、それは西ノ海と天因の人生そのものに深く関わるということだったのではないかと、というのが私の結論になります。

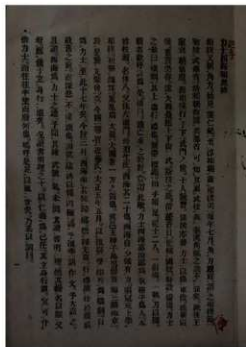


図9 西村天因「力士西海報恩碑」

「仁」や「孝」の落とし穴

ただし、ここで一つだけ注意したいことがあります。

この「孝」というのはとても尊い気持ちです。子供が親を慕う、これは誰かに教えてもらってそうなるわけではないんです。親が子を慈しみ、子が親を慕う。これは先天的なものです。教えてもらってそうなるものではない。そこで儒教の祖の孔子は、この「孝」を大切に、さらにそれを拡大した「仁」の気持ちと合わせて、「孝」と「仁」を一番大切な道徳だと言っています。素晴らしい道徳です。この気持ちが世界に広がっていけば穏やかな思いやりに満ちた世界になるわけです。

ですから孔子以来、二千数百年にわたって「孝」や「仁」は尊重されている道徳なのです。ところが、ちょっと落とし穴もあります。というのは、「孝」は親子の関係で、「仁」というのも、まずは身近な存在、自分の家族や親戚を対象にします。それを徐々に拡大していく。そうすれば世界全体が思いやりに満ちた世界になると孔子が言っているんですが、私たちはなかなかそれができない。その輪を広げていくのを途中でやめてしまうということがあります。それだけならまだいいんですが、そのサークルに線を引いてしまうんです。線を引いて、そのサークルの外側にいる人は敵だとみなしてしまうんです。サークルの内側にいる人には愛を注ぐけれども、外側の人はその裏返して敵と見なしてしまう。しかも内側への愛情が強ければ強いほど、外側への憎しみも強くなるわけです。

これが人類始まって以来、今も続いている戦争の原因です。戦争というのは、思いやりの気持ちを広げていくのを途中でやめて、サークルの内側にいる人は愛するが外側にいる人は憎しみの対象であると考えてしまうことから始まるのです。ですから、「仁」や「孝」の道徳は素晴らしいけれども、この内から外へと広げていくのを途中で止めて線を引き、敵味方に分けてしまう、愛を憎しみに反転させてしまう、ここに注意点があります。

「薩摩武士に漢学を注入したもの」が天因

では、西村天因という人はどうだったのか。家族や親戚だけを愛した人なのかどうか、ここが問題だと思うのです。最後に天因を当時の人々がどのように評価しているか。それをご紹介しながら私のまとめにしたいと思います。

まず天因は同郷の子弟のために学費の面倒をよく見ていたそうです。種子島から大阪に出てくる人もいたでしょう。あるいは種子島で活躍している人、鹿児島に出て行った人、その中でなかなか学費の工面ができない人に学費の面倒をみたということがたくさんの証言で残っています。しかし、天因はサラリーマンです。そんなにたくさんの財産があったわけじゃないと思います。ある人の証言によると、天因はよく借金をしたといいます。ただし人のために借金をしたということです。つまり天因という人は家族や親戚の人はもちろん愛する。しかし、そうでない人についても困っている人、苦境に喘いでいる人の苦難を見逃すことができない、そういう性格の人なんです。だから自分のためではなくて、人のためによく借金をしたと当時の人が言っています。

さらに天因は晩年東京に行きますが、東京の湯島聖堂で孔子を祭る祭典が行われました。そのイベントになかなかお金が集まらない。そこで天因は協賛金を得るための記者招待会というところに出かけて行き、大きな体を折り曲げて何度も丁重にお辞儀をしたというのですね。あれだけの著名人になると、だんだん反っくり返っていても不思議じゃないんですが、天因は家族でもない、同郷でもない、自分とは直接関係のない東京の人たちのために、180センチの体を折り曲げて協賛金獲得のために尽力した。そこでこの湯島聖堂で行われた孔子の祭り、孔子祭の当時の関係者によると、その成功は天因の人格によるところが大きかったというふうに言われています。

ですから、天因の「孝」や「仁」の気持ちというのは決して狭いものではない。非常に大きな心ではなかったかと思います。そうした度量の大きい天因の人柄はなかなか一言では言い表せないのですが、当時の大阪朝日の同僚の人がうまいことを言っているので最後にご紹介します。

「薩摩武士に漢学を注入したものが天因だ」と言っています。この場合の薩摩武士というのは、他人の不幸や苦しみを見過ごすことができない、そういう義侠心です。明治時代になって西洋から近代文明と資本主義が入ってきます。すると多くの人たちは、打算で動くようになります。利益で人間関係を考えてしまうのです。そういう時代にあって、天因は自分の利益にならないことに手を差し伸べるわけです、自分が借金をしてまで人を救おうとする。それはまさに江戸時代までの薩摩武士の姿に重なる義侠心ですね。ただ、それだけだったら武士になってしまいます。加えて天因という人は、種子島と東京と大阪で活躍した漢学者、つまり薩摩武士に漢学を注入した人であったと。

私が西村天因を研究するのは、単に大阪大学にゆかりの資料があったからということだけではないのです。この天因の人柄、その気持ちと行動に深い感動を覚えるからです。

100年も歴史が経ちますと、だんだん記憶が薄れていきます。ですが、どうか西之表市の皆さん、種子島の皆さん、もう一度記憶を新たにして、この天因を語り継いでいってください。

では第2部では、より多角的に5人でお話をします。第1部の私の講演はここで閉じさせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

西村天因を語ろう 次の100年のために

パネラー 陶徳民、竹田健二、町泉寿郎、六車楓

司会 湯浅邦弘

はじめに

(湯浅)

それでは第1部に続きまして、第2部パネルディスカッションを始めたいと思います。私は第1部で講演させていただきました湯浅邦弘です。普通は、講演をするとそれでお役御免になるのですが、今日は2部の方も司会ということで加わらせていただきます。それではまず先生方を紹介します。舞台上手、皆さんから向かって右の方からご紹介いたします。

関西大学名誉教授陶徳民先生です。島根大学教授竹田健二先生です。東京の二松学舎大学教授の町泉寿郎先生です。立命館大学専門研究員の六車楓さんです。司会は私、湯浅が務めさせていただきます。

パネルディスカッションですが、大きく言いますと3部構成でお話をさせていただきます。時系列で「過去・現在・未来」と言っていていいでしょうか。つまり、最初に自己紹介を兼ねてこれまでそれぞれの先生方が種子島や西村天因とどういう関係があったのか、ということをご披露していただきます。これは「過去」ですね。そしてメインとなる「現在」。これは西村天因という人が日本の文化史の上でどのように研究され、評価されているのかという現時点のことを話していただきます。そして最後に「未来」。これは今日のパネルディスカッションのサブタイトルにもなっていますが、次の100年、これらに向けて私たちは何を大切にしなければいけないのかということをそれぞれの先生に話していただきたいと思います。

以上の「過去・現在・未来」という大枠でお話をさせていただきます。そしてパネルディスカッションですので、特に私の方からこういうことをおっしゃってくださいという制約はできるだけ付けず、自由にご発言していただきたいと思います。しかしあまりに不規則発言をされますと、收拾がつかなくなりますので、ある程度私の方でコントロールさせていただきたいと思っています。それから発言につきましては私の方から指名をさせていただき、順不同で進めていきたいと思っておりますので、皆さんもよろしく願います。

それではまず4人の先生方、自己紹介を兼ねて、ご自身と種子島や西村天因との具体的な関わりについてご紹介いただきたいと思います。順不同で、私の一番近くの六車さんからお話しいただけるでしょうか。

一、パネラーと種子島・西村天因との関わり

(六車)

立命館大学の六車と申します。私は大学院生のときに湯浅先生のもとで漢文を学んでおりまして、そのときに湯浅先生の授業で、西村天因の鉄砲伝来の石碑「鉄砲伝来紀功碑」の文章を人生で初めて読みました。それが天因の文章との初めての出会いです。それをきっかけに今年（2024年）3月に実際に人生で初めて種子島に来まして、その「鉄砲伝来紀功碑」やその他の西村天因が作った石碑、その他の天因関連資料を拝見いたしました。本日はよろしくお願いたします。

(湯浅)

六車さんは今日のパネルディスカッションの平均年齢をぐっと下げていただいています。大変優秀な方で、私が大阪大学を定年退職するときに、同時に大学院を修了されて博士号を取得され、現在は立命館大学に勤めておられます。どうぞよろしくお願いたします。

それでは続きまして竹田先生をお願いしたいのですが、竹田先生は私と一緒に文化財調査を進めた仲で、最もたくさん回数種子島に来ておられます。その辺のことを含めて自己紹介よろしくお願いたします。

(竹田)

島根大学の竹田です。よろしくお願いたします。私は六車さんよりもずっと年が上ですけども、私も40年ほど前、大阪大学の大学院の学生でした。湯浅先生はその時の大先輩です。当時、西村天因のことを学ぶチャンスが実はあったのですが、私はその機会を逃しました。大阪大学には懐徳堂に関連する貴重な資料が大変たくさんあります。懐徳堂文庫と呼ばれるもので、この中には天因の旧蔵書である碩園記念文庫も入っております。当時の先生からは「こうした貴重な資料を所蔵している大学で学んでいるのだから、あなたたちも懐徳堂のことを勉強しなさい」と言われたのですが、私は不真面目な学生だったものですから、ほとんど手をつけていませんでした。

大きな転機になったのが、2000年の大阪大学創学70周年の記念のイベントです。湯浅先生が、懐徳堂文庫にある貴重資料をWebで公開するためのデジタルコンテンツを作る「懐徳堂研究会」を立ち上げられ、この研究会に私も入れていただいて、懐徳堂に関する研究を始めました。研究会の他の皆さんは、大体江戸時代の懐徳堂のことを研究したのですが、私は天邪鬼なものですから、何か人と違うことをと思って、明治の末に西村天因を中心に懐徳堂を顕彰する運動が起こった経緯に興味を持ち、研究を始めました。これが、私が天因さんに関わるきっかけになりました。

二つ目の転機は、湯浅先生の講演の中にお話がありました7年前のことです。湯浅先生が西村御夫妻にお会いになった後、その日のうちに私にメールを送ってくださいました。「種子島に天因関係の資

料があるそうだから、一緒に行きませんか』というお誘いです。以来、私は種子島に通っておりまして、今回が16回目の来島になりました。キビナゴも食べましたし焼酎も飲みました。大好きなところになりました。大変いいところと思って今回も参りました。よろしく願いいたします。

(湯浅)

ありがとうございました。それでは続きまして町先生、自己紹介をお願いいたします。

(町)

東京の二松学舎大学から参りました町と申します。先ほど湯浅先生から、靖国神社での土俵入りの話がありましたが、私の大学はそのすぐ側で、窓から靖国神社の鳥居や武道館や国会議事堂が見える場所にあります。

私は日本の漢学の歴史を研究してきましたので、西村天因の名著『日本宋学史』が日本漢学の分野において極めて優れた本だと思っているということをお話ししたいと思います。どういう点が優れているかという点、中国の宋・元・明の時代の中で、実際には西村先生が扱っているのは主に明代のことですけれども、中国近世の学術文化が日本列島に伝わってきた具体的な様子、当時の日中文化交流史の実態を大きな視点で描いている点がすばらしいと思います。

例えば、古くは遣隋使、遣唐使の時代の文化交流の足跡は奈良の正倉院に残っている。それから江戸時代の頼国時代にも、長崎貿易を通して中国から伝わった書籍は東京の内閣文庫に残っている。では、明代中国と中世日本の学術文化交流がどうであったかということは、あまり一般的には知られていませんね。しかし九州各地を歩いてみると、私も宮崎の安井息軒や日田の威宜園など各地に資料調査に伺うのですが、本当にいろいろな文物が残っています。特に14世紀以降になるとモノが増えてきます。西村先生が明らかにした薩摩の桂庵玄樹だけではなく、志布志に行っても、佐土原に行っても、飲肥に行っても、その時代に創建された禅宗寺院があり、中央の京都五山から名僧が派遣され、天皇のご宸翰のような寺宝が残っていて、というところが九州各地にあるんですね。

これは明代文化を受け入れる窓口が中世日本には各地にあったことの証しだと思っています。また、江戸時代の漢学の成果が決して一朝一夕のものでなくて、何百年もの長い蓄積から生まれたものであると感じました。したがって、西村先生が『日本宋学史』の中で中世日本における日中文化交流について描いてみせた大きなビジョンは、日本漢学や日本文化史において非常に意味のあることだと私は思っています。

(湯浅)

ありがとうございました。町先生は今回種子島初めてですね。ですが、今おっしゃったように九州各地について、たくさん調査をされています。日本漢学研究の第一人者であります。

それでは自己紹介の最後になりますが、陶徳民先生よろしくお願ひします。

(陶)

今年は、私が初めて来日した1984年12月から数えてちょうど40年目になります。当時は上海復旦大学の院生で、修論「幕末明治初期の日英関係」を執筆するために、姉妹校・関西大学の大学院交流研究生として5か月間滞在し史料収集をしました。

1986年春、同大歴史学部の若手教員となった私は再度来日、大阪大学大学院の補欠試験に合格して博士後期課程に入りました。近世大阪の町人学校「懷徳堂」の儒教思想を研究するため、真っ先に西村天因の『懷徳堂考』を読み、五井蘭洲と中井竹山・履軒兄弟の深い学問的造詣に感心し、また天因の『江漢溯廻録』(図1)という面白い旅行記にのめりこみました。それは長江の下流地域の大会・上海から中流地域の大会・武漢へ廻る2泊3日の船旅(復路も同様)の記録であり、途中、南京、安慶、九江などの都会に寄港し、筆談や漢文詩の贈答を通じて多くの知識人と交流し、時間は1897年12月から翌年2月にわたりました。私は1951年に生まれてから、ずっと武漢出身の両親と上海で住んでいました。青少年時代に、本籍地の武漢にいる兄と姉に会うために上海—武漢間の往復の船旅を3回しましたため、天因の旅行記に一種の親しみを感じました。

1991年に会誌『懷徳』第60号に「西村天因と張之洞の『勸学篇』」を發表し、1897年の大晦日、天因が武昌で張之洞湖広總督(湖北・湖南両省を管轄する地方大臣)を表敬訪問後に提出した建白書がいかにか張氏の日本留学推奨の主張に影響を与えたかを論証しました。2007年にこの論文を天因の恩師で鹿児島出身の東京帝国大学教授重野安禪、天因の同僚(大阪朝日新聞社そして京都帝国大学)内藤湖南について書いた論文などとあわせて『明治の漢学者と中国—安禪・天因・湖南の外交論策』(図2)にまとめました。10年後の2017年にまた『日本における近代中国学の始まり—漢学の革新と同時代文化交渉』において、天因の清朝文章学に関する造詣と中国の文学改良運動に対する見識を評価しました。したがって、今回鉄砲館所蔵資料に詳しい湯浅先生と竹田先生と一緒に来島し文献調査できることを大変有難く思っています。どうぞよろしくお願ひします。

(湯浅)

よろしくお願ひします。陶先生の略歴をご紹介いただいた通りで、大阪大学の私の大先輩にあたるわけです。陶先生は日本史の



図1 江漢溯廻録



図2 『明治の漢学者と中国—安禪・天因・湖南の外交論策』

研究室で、私は中国哲学という中国の思想を勉強するところですね。そして懐徳堂研究の開拓者でもあるわけです。さらには今ご経歴の説明があったように、西村天因が長江をたどって武漢まで行くという旅行をご自身も追体験されたことがあるように、「日中文化交流学」という大きな視野を持っておられます。これまでの研究は日本国内だけを見ていたのですが、天因の活動というのは当時の中国、清国にも及んでおり、また世界周旅行もしていますので、そういう大きな視野から研究を進めてくださっているんですね。

それぞれ詳しい中身については、この後、具体的にお話をいただきたいと思いますが、以上ご紹介いただきましたように、それぞれの先生方、種子島や天因とそれぞれの関わりを持って本日臨んでおられます。

二、近代文化史における西村天因

(湯浅)

それでは初めに町先生に伺いたいのですが、町先生は日本漢学史のご専門ですが、天因というのは、漢学史上でどういう意義を持っていたのかという点を知りたいのです。私の第1部の講演でも少し触れました東京大学古典講習科ですね、天因が若くして16歳で一念発起して東京に出て、そして東大古典講習科で学ぶわけですが、これはどのような組織で、どういう意味を持っていたのでしょうか。

天因が学んだ東京大学古典講習科

(町)

明治前期、東京大学に一時、古典講習科というコースが設けられました。卒業記念写真も残っていますが、そこに西村天因が写っていれば、今日は写真を持ってきてご覧に入れたいところなのですが、残念ながら写っていません。なぜかという中退してしまっただからです。中退といっても学業不振とかそういう理由じゃありません。元来、東京大学という学校は幕府時代の開成所が前身で、洋学の学校として始まりますから、和漢文をやりたいという学生は殆どいません。東京大学は明治10年4月12日に創設されて、明治19年に帝国大学という名前に変わりますが、この間に文学部の和漢文学科の卒業生はわずか2人しかいません。しかも文学部学生の8割は政治学・理財学科に在籍していて、この学科自体が明治18年に法学部に移ってしまいます。そうするともう文学部自体がほぼ無人になって、いつ潰れてもおかしくない状況になってしまいます。

大学創設から10年間に和漢文学科の学生は2人しかいなかったわけですが、やはり日本の高等教育機関として自国の古典を扱える人が誰もいなくなる状況は良いことではない、このままでいいのかという反省が起こってきます。しかし、和漢古典を専門にする人材を養成しなきゃいけないだけだと

も、大学の本科に入学するためにはその前に予備門で何年間も外国語を勉強しますから、せっかく外国語を勉強したのに、和漢文をやりたいなんていう本科生はいるはずがありません。そこで、臨時的に設置されるのが古典講習科でした。

古典講習科には国書課と漢書課ができます。明治15年に国書課の1期生が始まり、明治16年に漢書課という漢籍をやるコースが増設されて、西村天因はここに入ります。ところが、森有禮もりありのりが文部大臣になった時、明治19年に東京大学から帝国大学と名前が変わって、古典講習科も一時は即廃止というわさが流れるほど和漢古典のコースは削減されてしまい、担当教官も大半がクビになってしまいます。古典講習科の生徒たちもこれを機に急に待遇が悪くなって、学費の支給も打ち切りになりました。それで西村はやむなく中退することになります。ですから、古典講習科というコース自体が、過渡期の大学の様子を具体的に知るうえで、明治の学術史を考えるうえで重要な意味があるということ。それから、西村のように東京大学が帝国大学になった過渡期に学んで中退に追い込まれている事例から、東京大学から帝国大学への改組は単なる呼称の変更ではなくて、実は大きな変化があったこと。西村が学んだ古典講習科というコースが持つ意味と、西村が古典講習科に進学中退したことから分かることを、私はそのように考えています。

(湯浅)

わかりました。天因は官費生という、要するに学費を免除された生徒だったわけですね。入学金、授業料払って入ってくる学生と、今だったら特待生にあたるでしょうか、奨学金もらって学費免除で入ってくる学生とがいて、天因はそのうち官費生だったと。ところが、いま町先生がおっしゃったような制度上の変更があって、学費が続かなくなったということがあるようです。天因の個人的な理由もあるでしょうが、当時のそういう教育政策が深く関わっているということなんですね。大変興味深く思います。

結局、中退という形になり、それから関西に移ってまいります、そのあたりの経緯はどうなんでしょうか。

東京から関西へ

(町)

さっきも借金についてのお話がありましたが、西村が帝国大学を中退した時、住まいも大学から少し離れた場所に移ったらしいです。それで、生活費を稼ぐために文章を書いて売る、売文稼業に入っていきます。当時は自由民権運動などの盛んな時代ですから、西村も「政治小説」などを書くんですね。『解屋とくやの籠かご』という政治小説を書いて、それを博文堂という出版社をやっていた原田庄左衛門はらだ しょうざえもんのところを持ち込みます。食うや食わずの生活をしてボロを着ていたようですが、西村は大柄な人で、態度も大きいのかはわかりませんが、そういう帝大生くずれが自分の原稿を持ち込んで売り込み、持

ち込まれた原田庄左衛門のほうも何か見どころがあると思っただけです。初対面の西村の原稿を、1枚1円で買うことにしたのでそうです。そして出版してみると評判になりよく売れたそうです。それ以来生涯にわたって原田庄左衛門と西村との交流は続くのですが、そういう売文生活を数年やっただけです。

しかしやっぱり西村は入ってくるよりも余計に使うわけですよ。結局東京にいられなくなって夜逃げして、中山道を友人と二人で都落ちしたんだそうです。京都まで逃げてきて、ようようのことで宿屋に転がり込む。しかし転がり込むと言っても、我々とは転がり込み方が全く違います。京都で江戸時代からやっている最高級の旅館に、^{ひいらぎや}終屋というのがあります。俵屋とか終屋は1泊10万円ぐらいします。無一文であるはずの西村はそこに転がり込んで、その終屋の主人夫婦になぜかすごく気に入られて、次の生活のめどが立つまで長逗留して、それで草鞋錢までもらって宿を免ったという逸話が残っています。大阪で新聞記者になる前の話です。こういうところがやっぱり我々凡人とは違うんだなあと思いました。

(湯浅)

ありがとうございます。何とも魅力のある人ですね。官費制度の廃止によって退学せざるを得なかった。食うや食わずの生活、さらには関西への移住、このあたりから波瀾万丈の人生という感じがいたしますが、その都度それを受け入れてくれる人がいるというのが面白いところですね。ありがとうございます。

それでは次に陶先生に伺います。陶先生は先ほどご紹介しましたように、日中文化交流史ということ長くやっておられますので、近代という歴史が大きく転換する時代において、天囚が中国とどういう関わりを持って、どういう貢献をしたのか。そういうことを少し具体的なエピソードを交えて教えてください。

日中文化交流史における天囚

(陶)

先ほど天囚の「江漢廻廻録」という旅行記を紹介しましたが、その背景は日清戦争で悪化した両国関係を改善しようとして、当時の参謀本部次長で鹿児島出身の川上操六に頼まれて行った旅でありました。要は、天囚が巧みな漢文力によって、排日論者の張之洞(図1)に、清国がロシア・ドイツ・フランスの三国と組むよりは、日本・イギリス両国と組んだ方が有益で得策だと説得することを川上が期待していたわけです。なぜならば、1895年春下関で行われた日清戦争の停戦と賠償に関する交渉時、日本が割譲しようとした満洲南部の「遼東半島」の還付問題をめ



図1 張之洞

ぐりいよわる「三国干渉」を行ったこの三国が、いまや相次いで清国の沿海部に大きな租借地（99年間契約）の獲得を求め、清政府を大いに困らせていたからです。この機を捉えて、清国の外交における親ロシア的方針から親日・親英的方針に転換させようとしたわけでありました。その結果、張之洞は天因の説得に好感をもち、自筆で揮毫した1幅の書（図2）を天因に贈りました。



図2 天因に贈られた張之洞の書

ここに、三省堂が出版した近代初の『漢和大字典』（1903年）（図3）という辞書の扉の画像があり、二松学舎大学図書館の所蔵であります。序文を書いたのは、「貴族院議長・学習院長・公爵」の肩書をもつ近衛篤磨と「貴族院議員・文学博士」重野安禎の二人であり、監修者が重野、「東宮侍講・文学博士」三島毅および「北京大学堂教習・文学博士」服部宇之吉の三人であります。辞書の名称「漢和大字典」という5文字を揮毫したのが、当時日本の近代的大学運営の経験を学ぶために来日中の北京大学堂総教習（北京大学副学長にあたる）呉汝綸という大物学者であり、服部の上司でもあります。呉氏の日本訪問、ドイツに留学中の東京帝国大学教員服部が北京大学堂の師範学院院长に雇われたこと、そしてこの両者がともに『漢和大字典』の出版に関わったことなどから見て、当時の日中教育文化交流がいかに盛んであったかが分かります。



図3 『漢和大字典』

次は、天因が大正初期に日本語に訳した中国の明時代の南方戯劇（芝居）の代表作、『琵琶記』（図4）という戯劇の脚本の扉であります。訳文は最初大阪朝日新聞に連載し、連載が終わってから簡易製本で出版され、当時京都滞在中の王国維という大学者が天因に頼まれて序文を書きました。序文の中で王氏は、今まで外国語に訳された中国の戯劇の脚本、例えば19世紀にフランス語に訳された『西廂記』という北方戯劇の脚本がありましたが、それよりもっと難しく、台詞だけでなく歌詞も多く含まれる南方戯劇の脚本がまだかつて訳されたことがなく、天因の『琵琶記』訳が初めてのケースだと述べています。



図4 和訳『琵琶記』

次は、中国の戦国時代における『楚辞』、つまり楚の地方（今の湖北・湖南両省を中心とする広域の地方）で詠われた歌詞の集大成であり、屈原の『離騷』がその代表作であります。南方文学としての『楚辞』と北方文学としての『詩経』（「五経」の一つ）が中国古典文学を構成する重要な部分となっています。天因は清末における3回の中国旅行およびそれ以降の購入を通

じて歴代の『楚辞』関連注釈書と研究書 100 種類以上を収集し、いわゆる「楚辞百種」というコレクションを作りました。中国でも 1ヶ所に 100 種類以上が集まっている図書館がないため、1936 年に北京の名門・清華大学国文学部の銭籀孫教授が学生たちを懐徳堂に連れて調査したことがありました。最近 30 年間も、日中共同研究のプロジェクトチームが時折大阪大学図書館を訪れ、湯浅先生のお話でコレクションを調査しました。

『楚辞』と天因

(湯浅)

はいありがとうございます。今陶徳民先生からご紹介のあった「楚辞百種」という天因の旧蔵書ですね。『楚辞』というのは中国古代の歌謡を集めたものですが、大阪大学にその「楚辞百種」という天因が集めた貴重な楚辞資料集があって、現在でも外国や日本の研究者がたびたび大阪大学の懐徳堂文庫に見学に来られる。その主な目的の一つは、その天因が集めた「楚辞百種」を見たいということなんです。それくらい高く評価されています。陶先生、この『楚辞要籍叢刊』(図 5)ですけれども、こういうのができていて、これやはり現代中国の研究者も天因を高く評価しているというふうに考えていいでしょうか。



図 5 『楚辞要籍叢刊』

(陶)

そうですね。天因の「楚辞百種」コレクションの中には、中国ではすでに散逸している珍本もあります。天因はこのコレクションにもとづき、綿密な研究を行いました。近年中国で刊行された『楚辞要籍叢刊』(全 20 冊)に精選された 25 種の重要著書が収録されていますが、そのうち、日本人による著書 3 種が含まれており、中の『楚辞纂説』と『屈原賦説』という 2 種が天因の著わしたものであります。

(湯浅)

はいありがとうございます。日本国内において天因さんが注目されている。そして私たちが今一生懸命勉強しているところなんです、現代中国の方でも高く評価されて、そして集めた「楚辞百種」というコレクションの中には、当の中国ではもうない貴重なものもあるんですね。つまり、天因が集めたコレクションでないと見ることができない、そういう本がある。そういうところが現在の中国の研究者も注目しているところということですね。

それでは、先ほど町先生に東京大学在学中と、退学してから関西に移るまでのお話をいただいたん

ですが、次は大阪に移ってから天因さんの活動はどうだったか、その中で私の第1部の講演でもご紹介しました懐徳堂の再建というようなことがあるわけですが、そのあたりは竹田先生が一番詳しいので、天因が再建に尽力した大阪の懐徳堂について少しご紹介いただきたいと思います。

天因が尽力した懐徳堂の再建

(竹田)

天因が大阪に来て大阪朝日新聞に勤めるようになったのは、明治23年です。それまで小説を書いていた天因は、引き続き新聞や雑誌に小説も書きましたが、私の理解では、明治30年代以降、日本各地に埋もれた学者、同時代の学者ではなく、江戸時代に活躍したけれども明治以降着目されることがなくなった漢学者を発掘し、大阪朝日に連載を書きました。それは旅行記でもあり、紀行文といったような形です。先ほど町先生が触られました日田の成宜園、福岡など、九州の各地などを訪問して、現地に残された資料を見たり、古老に会ったり、そういうことを天因はやっています。当時大阪に住んでいた天因は、当然江戸時代の大阪にも興味を持ったのでしょう。懐徳堂という、先ほど湯浅先生のお話も出てきましたし、また陶徳民先生も研究されました、江戸時代大阪にあった懐徳堂というユニークな学校に天因は注目します。

ここでその懐徳堂のことを少しご説明させていただきます。天因さんが亡くなって100周年のイベントに今私も参加しているわけですが、今年は懐徳堂ができて300周年にあたり、大阪大学ではこの秋から懐徳堂300周年のイベントをいろいろとやられており、今もまだ一部展示が続いています。懐徳堂の創設は享保9年ですが、湯浅先生のお話にありましたように、当時は武士の世の中ですが、大阪の町人たちは、自分たちが懐徳堂という学校を作りました。自分たちが学ぶための学校を作り、そこに先生を呼んだわけです。そういう学校として懐徳堂が立ち上がります。懐徳堂のどこが大変ユニークであるかということですが、当時学問をしようと思うと、例えば有名な先生のところに行って門人となります。先ほど述べた、天因が発掘しようとしたような各地の漢学者のもとにも門人が集まって、いわば学校のようなものもできておりました。しかし、ある先生を慕う人たちが集まってきて、その先生のもとで学ぶ、といったものは、家塾とか、私塾とか言われるものです。懐徳堂という学校とは、それとは違いました。

どう違うかといいますと、懐徳堂が出来たばかりの時のルールには、懐徳堂の先生は世襲をしないというルールがありました。懐徳堂の初代の先生は三宅石庵みやけいせわんという学者で、石庵が学主を務めました。しかし、高齢でしたのですぐ亡くなります。その後どうしたかという、石庵には息子がいたのですが、その石庵の息子ではなくて、石庵の弟子の1人である中井寛庵なかいしやうあんが学主となります。こうした形で、学主は世襲をしないというシステムで懐徳堂は始まっています。ただし、後にそのルールはなくなってしまいます。3代目の学主は石庵の息子の三宅春楼みやけしゅんろう、4代目は中井寛庵の息子の中井竹山なかいちくざんという形で、中井家と三宅家とが交代で学主になりましたが、4代目の竹山の後は、ずっと中井家の者が受

け継いでいきました。

懐徳堂が一番活発だったのは、4代目学主の竹山、竹山の弟の中井履軒なかい りんけんの頃です。鉄砲館におきましても懐徳堂に関する展示が9月まででありましたが、その中で二人の肖像画が展示されておりました。この二人の頃は、江戸にあった幕府の学校、武士の学校である昌平坂学問所よりも懐徳堂の方が活気があったといわれます。大阪は経済力だけではなく、学問的にも非常に活発な時期があったわけです。しかし、竹山・履軒以降、中井家の関係者が学主を世襲していった懐徳堂は、次第に活力を失ってゆき、幕末の混乱期を乗り越えることができずに、明治2年に閉鎖されてしまいました。

懐徳堂が閉鎖された時の中井家に、当主の桐園とうゑんとその息子の木菟麻呂つぐまろがいました。桐園は明治11年に亡くなり、その後木菟麻呂は、明治15年に一家を挙げて大阪から東京に行ってしまいました。木菟麻呂は大正時代に関西に帰ってくることとなるのですが、そうしたことから、明治時代後半の大阪では、懐徳堂のことは次第に忘れられていったようです。

ところで、西之表市は今年『西之表市史』を刊行されましたね。おめでとございます。では、日本において市史が最初に作られたのはどの市か、ご存知でしょうか。日本で最初に市史を作ったのは大阪市です。大阪市の幸田成友という、幸田露伴こうたろうはんの弟である歴史学者を東京から招いて、『大阪市史』が作られました。幸田成友は『大阪市史』を書くにあたり、懐徳堂にも触れる必要があると考えました。彼は懐徳堂を知っていたんですね。ところが、懐徳堂に関する資料がないんですよ、大阪には。幸田は困って、木菟麻呂のところに行きます。東京に戻って木菟麻呂と会い、中井家所蔵の懐徳堂関係資料を見せてもらいます。そして、これらの資料は重要だから是非写させてくださいと木菟麻呂に頼み、写本を作って大阪に取り寄せました。そうして『大阪市史』に懐徳堂のことが記述されました。これは明治終わりの頃のことです。

大阪でも忘れられていった懐徳堂に注目すべきである、大阪は経済だけじゃありません、文化的にも栄えていたのですよ、とあって、懐徳堂の顕彰復興の運動を中心に進めていったのが、実は天因さんです。そうした運動が始まる直接のきっかけは何だったのか、というと、木菟麻呂が自分の先祖、つまり中井家の先祖を大阪で祭りたい、自分は東京に住んでいるけれど、大阪において中井家のお祭りをしたいと考えて、天因の先生である重野安繚しげのやすらふ先生のところに行ったことです。重野は「それはいいことだ、大阪には私の弟子の天因がいるから」と賛同します。そこで木菟麻呂は、大阪の天因に会いに行きます。『大阪市史』のことで既に関係のあった幸田成友が木菟麻呂を案内し、2人で天因に会いに行くと、天因も「それはいい、やろうじゃないか」と賛同しました。これが明治42年のことです。もっとも、この後天因は大阪府知事に会って協力を求めますが、木菟麻呂の願いをそのまま実現することはできませんでした。大阪府とか大阪市とかが、中井家という個人の家のお祭りに協力することには、やはり無理があったのであろうと私は思います。

天因はそこで、中井家ではなく懐徳堂を顕彰する祭典に大きく構図を変えた、と私は考えています。これは上手くいきました。大阪の政財界、教育界、言論界の人々も協力し、明治43年に懐徳堂記

念会という組織が立ち上がります。そしてこの懐徳堂記念会が、明治44年に大阪中之島の公会堂で懐徳堂記念祭という行事を盛大に行いました。記念会の会頭は住友財閥の住友吉左衛門でした。天因は委員長となり、実質的に記念会の事業を統括しました。この時の懐徳堂記念会は、記念祭を挙げるためにできた組織でしたので、記念祭が終わったら解散するのが筋でした。実際解散するわけですが、懐徳堂の顕彰がこれで終わるのもったいない、永続的に活動することができるように法人化しよう、財団法人にしよう、という話になりまして、大正2年に財団法人懐徳堂記念会ができました。この団体は、今も「一般財団法人懐徳堂記念会」として存続しています。記念会が財団法人化した時、天因はその理事になります。湯浅先生のお話にもありました通り、財団法人は大正5年には学校も作ります。重建懐徳堂です。懐徳堂を再興したわけですね。

ご存知のように、明治時代に入りましてから、近代学校教育制度が設けられて、小学校・中学校・高等学校、そして町先生のお話にあった帝国大学ができました。明治の末には京都にも帝国大学がもう一つできました。そうした近代学校教育制度が整備されていく中で、重建懐徳堂は学校教育制度の中に入らない学校として作られました。これは基本的に夜間に学ぶ学校です。重建懐徳堂では平日の夜、また週末に講義や講演が行われて、懐徳堂がそうであったように、働きながら学びたいという人たちが集まって学びました。そういう学校として作られたのです。天因も講師として講義を行いました。天因は大正10年に宮内省御用掛に任命されて、東京に行ってしまうから、講師を続けることができませんでしたが、やはり懐徳堂の復興の大きな基軸となったのは天因でした。天因を中心に懐徳堂の顕彰運動は始まり、盛り上がっていったと私は考えております。

(湯浅)

はいありがとうございます。懐徳堂という天因さんが惚れ込んだ大阪のユニークな学校があったということをご紹介いただきました。ここに由来する資料が大阪大学にあったので、私たちはそのこと自体は知っていたんですけども、実は種子島にも西村さんのお宅とか鉄砲館とか、あるいは鹿児島島の黎明館とか、そういうところにも天因関係の資料があるということを7年前に知って調査を進めているわけです。

その点数は大変多い数千点の単位なので、今日はお話することはできませんけれども、竹田先生どうでしょうか。7年前から進めている資料調査で、特にどういう資料が発見されたのかいうことを簡潔にご紹介いただけないでしょうか。

発見された新資料

(竹田)

天因さんが亡くなったのが大正13年ですが、その時に、天因さんの蔵書のリストというものが実は作られています。これはおそらく、天因自身が作った目録をベースにしたと思われます。不思議なこ

とに、その蔵書リストには名前があるけれども、行方が分からない、という資料が多数ありました。大阪大学には碩園記念文庫という、天因の旧蔵書が入っています。碩園記念文庫は、天因が亡くなった後、天因の友人たちがお金を集めて、西村家から天因の蔵書を買取り、それを財団法人懐徳堂記念会に寄贈したものです。戦後、財団法人懐徳堂記念会から大阪大学に寄贈されて、今は大阪大学にあります。ところが、蔵書リストには名前があるけれども、なぜか碩園記念文庫には入っていない資料があったのです。

天因が亡くなった時の蔵書のリスト、その中には先ほど陶先生のお話にあった『楚辞』関係の資料も記述があります。それから天因が書いた『論語』の注釈書も記載されています。天因は晩年『論語』の注釈書も書いてたんですね。天因の『楚辞』のコレクションは碩園記念文庫にありますが、『論語』の注釈書の方は、蔵書リストには載っているけれども、実物は行方が分かりませんでした。

私達が7年前から種子島に来て調査を行ったところ、天因の『論語』の注釈書は鉄砲館にありました。これは、鉄砲館が昭和58年にできた時に、当時の西村家の御当主である西村時昌さんが寄贈された資料に含まれていました。同じ年に鹿児島島の黎明館もできましたが、時昌さんは黎明館にも天因関係の資料を寄贈しておられました。こうして鉄砲館や黎明館に後に移された資料も一部ありますが、西村さんのお宅には天因関係の資料がたくさん残っていたわけです。

西村さんのお宅の中にあつた資料で、私が「これが一番すごい」と思ったものを紹介します。天因が懐徳堂の顕彰・復興の運動の中心になった時、天因は『懐徳堂考』という連載を大阪朝日にしております。『懐徳堂考』には上巻と下巻とありますが、上巻を書く前の段階で、懐徳堂について調べて原稿を書いたものがあるということを、天因自身が述べています。この原稿は、『懐徳堂考』上巻の草稿にあたるものとなるわけです。ところがその原稿は大阪大学にはありません。しかし、西村さんの家にある資料の中から見つかりました。スライドの写真を御覧ください(図1)。

この写真は、草稿にあたる資料を最初に見つけた時に撮った画像です。虫食いもあって開けないところもありましたが、京都の業者さんに修復してもらいました。それが次の写真です(図2)。このように修復によって綺麗になったので、ようやく中身を全部読めるようになりました。



図1 修復前の『懐徳堂考之一』



図2 修復後の『懐徳堂考之一』

私が思いますに、この資料は、天因が懷徳堂のことをよく勉強していたということが、本当によくわかる資料です。こういう資料があったことは、天因がどういう研究をしていたのかを知る上で非常に貴重です。

どう貴重なのか、一点だけ申し上げますと、朝日新聞に『懷徳堂考』上巻を連載した時には、おそらく字数などの制約があったと思います。このため、天因がどのような資料に基づいて書いたのか、天因は何を根拠としているのかが、よくわからない部分があります。ところが、この西村さんのお宅で見つかった資料を読みますと、天因は非常に細かく、記述の根拠となった資料を明示しながら、その資料を引用しているのです。私達が今日行う研究においては、何を根拠にそれを述べるのかということが大変重要です。天因の『懷徳堂考』上巻の記述だけでは、天因が根拠とした資料がわからないところがありますが、この草稿にあたる資料を見れば、記述の根拠が詳しくわかるのです。天因が実証的な研究をしていたということを、この資料によって裏づけることができました。そうした意味で、非常に大きな収穫がありました。

(湯浅)

なるほど、ありがとうございます。資料のビフォー&アフターを見せていただきましたけれども、こういう修復ということもすごく大事で、それによってわかる新しい研究情報があるということを教えていただきました。

それでは次に六車さんに伺います。天因さんは優れた漢文力を持っていたということで大変有名な学者でしたけれども、漢文ってなかなか難しいわけですね。それで先ほど自己紹介で大阪大学の私の授業で漢文を読んで天因さんのことを知ったと言ってくださいましたが、天因関係のものとしては、門倉岬の「鉄砲伝来紀功碑」の碑文ですね、あれご覧になったそうですけど、どういう感想を抱かれたのか、また、「鉄砲伝来紀功碑」以外にご覧になった石碑があったらご紹介いただけますでしょうか。

天因が撰文した碑文

(六車)

初めて「鉄砲伝来紀功碑」を見たときは非常に天気が良い日でした、まるで喜望峰きぼうの峰のような海を見渡しながら、波の音を聞きながら石碑を見て、この海の向こうから外国船がやってきて鉄砲が日本に伝来したんだと思うと、非常に胸が高鳴りました。それからあとは、石碑コレクションということで、いろいろと先生方にもご紹介いただいて、一緒に見て回らせていただいたんですけど、例えば檜城小学校の前田豊山先生とよひらの顕彰碑けんしょうひですとか、あと空港に向かう途中の古田小学校の「賢母遺蹟けんぼいせき碑」ひですね、これを見ました。

(湯浅)

はい、ありがとうございます。非常によく漢文が読める方なんですよ、六車さんは。石碑の漢文については、実は日本だけじゃなくて、中国にも行って現地の石碑も解説されたりもしているんですね。今ご紹介いただいた「鉄砲伝来紀功碑」、それから、榕城小学校の前田豊山先生の石碑、それから古田小学校の「賢母遺蹟碑」ですが、これはさっき紹介した小冊子の中に全部解説がありますので、また詳しくご覧いただきたいと思います。

その碑文というのは、基本漢文なわけで、なかなか難しい。現在は漢文というと高校の国語・漢文の中で初めて触れるっていう人が多いと思うんですけども、そういう高校で習う教科書の漢文と、昔の石碑に書いてある漢文というのは同じなんでしょうか。どこが違うんでしょうか。

(六車)

大きな違いが一つありまして、皆さん思い出していただきたいんですが、学校で習う高校で習う漢文には、返り点、いわゆる一二点ですとか、レ点ですとか、そういったものや、あとカタカナの送り仮名がついていたと思うんですけども、石碑の漢文は何も記号がついていません。漢字がずらっと並んでいるだけになっています。

(湯浅)

そうですね、漢文というのは中国から伝わってきたわけで、中国の方は上から順番に中国語で発音していくわけです。日本の我々の先祖はそれを和文に転換するんじゃなくて、そこに返り点、送り仮名を付けるという形で、原文をそのまま保存した形で翻訳したんですね。そのおかげで、私たちは漢文の雰囲気や伝えながら意味をつかんできた。そのために、返り点、送り仮名ということがありますが、天因さんも自分が漢文を読むために、あるいは他の人に漢文を教えるためにそういう工夫を当然してるわけですよ。その点はどうでしょうか。

漢文を読むための工夫「評点」

(六車)

そもそも天因さんの時代に至るまで、その当時漢文を教えるということ自体が、まず私達が学校で習ったその漢文教育と少し違ってまして、その当時はまず漢文の音読、それから読解、つまり内容を理解していくということと、あとは作文の指導が漢文教育の3本柱となっていました。先ほどの先生方のお話の中でも懐徳堂の再建というお話がありましたけれども、その再建された懐徳堂では、初めて漢文を学ぶ初学者の人たちに対しては素読、そういった読み上げていくという作業を通して耳から入る漢文を聞いて覚えていくという、そういう教育法を行っておりました。

実は、この教育法は、江戸時代から続く教育法でして、その一方で、天因は、後でまたご紹介しま

すけれども、「評点学」という文章を書いています。その文章の中で、音読の助けとなる評点、記号の重要性を指摘して、内容の読解や漢文の作文の手がかりにしたと思われます。現代は漢文を学ぶときは読解が中心だと思うんですけども、読解と作文というのは非常に関係が強いので、天因は文会を作って仲間と文章の鍛錬をしていたということがあります。

(湯浅)

「評点」ということについてご説明いただいでよいでしょうか。

(六車)

評点というのは、漢文を読むときにその漢字のすぐ横に付ける記号のことでして、棒線ですとか、あと丸や点、そういった記号をつけて、どれだけ自分が内容を理解しているかですとか、そういったものをチェックの記号としてつけたり、あとは文章の切れ目につけたりします。先ほども申し上げた通り、漢文は漢字がずらっと並んであるだけなので、まずは区切りながら読むという作業が必要になってきますので、チェックの記号をつけたり、あとは加筆したり修正したりするような場所に、二重線で消してその横に文字を書いたりしますけれども、そういった個人的なメモの役割をはじめとする、様々な役割があるのがこの評点という記号です。

天因は「評点学」という文章を残しておりまして、これは中国の様々な文献に書かれた評点に関する説明をいろいろ抜き書きしてぎゅっと集めたような文章です。本日お越しいただいた皆様はおそらく、漢文を読んだのは中学校高校が最後かと思いますけれども、大学で私達のように漢文を専門的に学ぶ人以外は、漢文と言いますと、その高校の漢文の教科書のように、いろいろ記号が既に打ってある、そういった文章の形を思い浮かべられる方が非常に多いと思います。ですが、先ほども湯浅先生がおっしゃったように、日本人にとって漢文は外国語なわけですから、訓点をつけて日本人が日本人の文法で理解できるようにしていくということが必要になってきます。それが、今の私達が漢文と聞いてぱっと思い浮かべる漢文の形になっているわけです。

中国の人がどういうふうにもその漢文を理解してきたのかというのを、少し古い時代から天因さんに至るまで少しスライドをお示ししながら見ていきたいと思うのですが、まず前のスライドに挙げたのは竹簡という中国で今、土の中から出てきている非常に古い、紙ができる前の時代に書かれていた竹の細長い札です(図1)。ここに書かれてあるのは、その古い時代の漢字です。今の形とは全く違うのですが、これも漢字がずらっと書かれてあるだけでして、よく目を凝らしてみますと、赤い星マークをつけた部分に小さな黒い点が打たれてあります。これが、その当時の人が、当時の中国の人が読んだ跡、要するに評点のような記号というふう考えられています。これも文章の区切りの位置に打たれたりしているわけです。これは紀元前の資料ですね。

その次のスライドお願いします。今度は紙の資料ですが、これは日本で読まれていた『論語』の返

り点などがついたタイプの書物です(図2)。ここにも星マークをつけたのですが、白丸や黒丸といった小さな丸が、ちょっと見えづらいのですが、実は打たれてあります。これは要するに評点です。あと併せて、訓点も小さいカタカナで打たれております。こういうふうにして文章の構成を書き留めたりですとか、ここで文章が切れるというのを自分の中でチェックを入れたりしながら、昔の中国人日本人ともに、文章を理解していったわけです。

ちなみにですけれども、最後の資料になりますが、この「評点学」という文章が西村天因の資料です(図3)。これも見ますと、赤い星マークを付けたところに、文字の横に赤い丸の判子が押されてあります。これが要するに評点に当たるものでして、ここをこういうふうにして天因を含む漢学者たちが漢文にチェックを入れながら読んできました。こういうふうには評点を付ける文化も人々が脈々と受け継いできたからこそ、現代の私達も漢文の教科書で見えるような形で、どこで文章を区切るのかというのを理解した上で、読み進めていくことができる、そういう文化の流れがあります。

(湯浅)

はいありがとうございます。なんと二千年以上前から続く漢文の評点という文化、そのような文化史の中で、天因は「評点学」という草稿を残していて、自身の漢文読解、あるいは他の人への漢文教育に生かしていたんじゃないかということが新しい資料からわかってきたってことですね。とても貴重な発見だったと思います。ありがとうございます。

それではまだまだ話は尽きないんですけども、一応4名の先生方に、ご自身の研究の視点から、お話をここまでしていただきました。



左から

図1 竹簡(一部。出典：清華大学出土文献与保護中心編、李学勤主編『清華大学藏戰國竹簡(8)』上冊、中西書局、2018年、8頁)

図2 『論語』(一部。横浜国立大学附属図書館所蔵。出典：国書データベース <https://doi.org/10.20730/100339225>、トリミング済)

図3 西村天因「評点学」(一部。六車撮影)

三、西村天因研究の可能性

(湯浅)

ここからは現在と未来における天因の意義あるいは私たちの研究の可能性ということについてお話をさせていただければと思います。

それで、これからの日本社会が必要とする天因の思想や業績、あるいは種子島への期待というものを含めてお話しいただきたいんですけども、まず竹田先生に先ほど資料のビフォー&アフターというのも画像でお示しいただきましたが、ああいうことを含めていかがでしょうか。

資料修復と継承の必要性

(竹田)

私が明治の末の懐徳堂顕彰運動はどのようにして立ち上がり、どのように展開していったのかを解明しようとした時、それからまた陶先生を始めとする多くの研究者が江戸時代の懐徳堂について研究された時、ほとんどが大阪大学の懐徳堂文庫の資料を活用しております。それは今も同じといってよいと思います。特に天因に関して、懐徳堂文庫の碩園記念文庫は天因の旧蔵書ですから、その資料を活用して研究することは、これまでも重要であり、またこれからも重要であり続けます。

実は私は先週も懐徳堂文庫に行ってきました。懐徳堂文庫は、大阪の豊中市にある大阪大学附属図書館の総合図書館にあります。総合図書館の6階にある貴重書庫に懐徳堂文庫資料があります。天因旧蔵の碩園記念文庫もその中にあります。貴重書庫におきましては、資料の出入だけでなく、温度・湿度等の管理が厳重に行われており、その中に入ることができる人は限られています。懐徳堂研究会のメンバーにつきましては、この貴重書庫への入庫を、図書館に特別に許可していただいております。書庫に入って、研究に使う資料を直接見るとを認めていただいているのです。そうした便宜を図っていただき、私を含めメンバーは大変助かっています。鉄砲館も黎明館におきましても、天因関係の資料があることを先ほどお話ししましたが、黎明館・鉄砲館におきましても、資料の保管・管理に十分配慮をしておられることと思います。

西村さんのお宅にあった資料も、現在は一部が鉄砲館や黎明館に寄託されておりますが、何といてもやはり100年以上も経つ資料です。資料そのものが、スライドでご覧いただいたような虫に食われてしまったものがあります。このまま痛んでいくばかり、虫に食われていくばかりで困ります。今、何とかしなければいけないわけです。特にページとページがひっついてしまい、開いて見ることができないようなものもあるのですが、先ほど紹介した資料のように、専門の業者に依頼するならば、読める状態に修復することができます。資料の保存と資料の修復を今後どうしていくか、ということが、私たちが行う文献資料に基づく研究において、非常に重要です。何とか種子島に幸に残っていた資料、私達が以前はその存在すら知らなかった天因に係る資料、前田豊山先生に関する資

料も含まれておりますけれども、そうした貴重な資料をこのままほっておいて、例えばですが、所謂「断捨離」されて捨てられてしまったのでは、後世に引き継がれなくなってしまいます。資料があったことすら、わからなくなってしまうわけです。これは十分懸念されることだと私は思います。もちろんこうした問題は、種子島だけの問題ではなくて、全国どこでも、あるいは世界中で起きている問題だと思います。

歴史的な資料をいかに後世に伝えていくのか、そのための修復や保管保存、そういったことをどのように取り組むかという問題、これは個人の力、単独のご家庭の力で解決することは非常に難しく、単独の自治体で簡単にすぐ解決できるような話でもないと思います。何分にもお金がかかるわけです。そこでみんなで知恵を出し合い、手を携えて力を合わせて、後世の人に何とか伝えることができるように努力をしなければ、今できる最大限の努力をしなければいけないと思います。微力でありませけれども、私もそこに何か力になることがあるならば、できるだけのことをしたいと考えています。

(湯浅)

貴重なご提言だったと思います。やはり資料の保存と修復と研究、これは三位一体で進めないといけないと思うんですね。ただ、竹田先生がおっしゃったように、保存修復にはお金がかかるわけで、これはやはり市とか県の財政の問題も関わってくるので、我々研究者だけではなかなか解決できないことでもあります。ただ現在では、いろいろな方法があって、例えば西之表市でもなさっている「ふるさと納税」とか、あるいはクラウドファンディングとかですね、そういう資金の集め方というのは、いくつかあるので、そういうことも含めて我々が協力できることがあれば、微力を尽くさせていただきますと思っています。

それでは六車さん、先ほど「評点学」の話もありましたが、どうでしょう、これからの特に教育とか、若手に向けて何かありますでしょうか。

漢文教育への提言

(六車)

先ほど紹介したような天因の資料も、昔の日本人がどのように漢文を読んできたのかというのが一目見てわかる生の資料であると思います。ですけれども、中学生とか高校生にとっては、非常に漢文というのは古くて、しかも難しいという最悪な科目というふうに捉えられているように私自身も感じております。やっぱり子供たちにとって漢文は、ただ難しい漢字が並んでいる、ただの漢字の羅列に過ぎないと思います。今、私も大学で漢文を読む授業を受け持っておりますけれども、大学生になってもやはり漢文を読むというのが非常に難しく、漢字一字ずつの意味にとらわれて、それが本当は文章であるということを忘れて一字ずつの意味だけを見ていってしまうという学生が多いような気がし

ています。

けれども、皆さんに先ほどお示ししたような資料を授業内で見せたりしますと、やはり昔の人々がどのように漢文を理解してきたかというのがわかりますし、私もそれについて説明を学生にしますと、その後に漢文を読むと、ぐっと漢文の読解力が上がるように感じております。やはりそれはおそらく学生自身がその古い漢文の写真を見たことによって、漢文は漢字の羅列ではなくて意味がきちんとある文章なんだということに気づいたからこそ、文章をきちんと理解するということができたと思います。

こういった経験は中学生ですとか、高校生にとっても意義のあることだと思いますし、大学生になる前の段階から、漢文の構造を俯瞰して見られるようになれば、どうしても受験のためですとかテストのために、その漢文の句法を覚えるということや、あとは漢字の羅列をただただ眺めてしまうようなことがより改善されて、現代文の読解と同じように、文章として漢文を理解できるようになるのではないかと思います。ですので、天因の資料はその1人の、当時の日本人の漢文の読解法を物語る資料として、教育現場でも非常に活用できるのではないかと思います。

(湯浅)

はいありがとうございます。西之表市で一度、中学生とか高校生を対象にして六車さんを招いて講演会をしていたら啓発活動になると思いますけど、いかがでしょうか。若いときに漢文は難しいな、苦手だなと思っちゃうと、そこで止まってしまうんですね。そうじゃないんだということを早めに知るということはすごく大事なことだと思います。これは今後の教育、特に若い方々の教育への提言として重要だと思いますね。

それでは陶先生、天因の今後の意義ということで、ちょっと先ほどの補足もあるということでしたけども、それを含めてどうぞ。

近代史における天因の活躍

(陶)

1枚目のスライドをもう一度お願いします。天因は中国の近代化が遅れていることに懸念し、助けやろうという気持ちがあったことが、私の研究の中で確認されました。先ほど、1897年に上海—武漢を往復する船旅のことを紹介しました。実は、その10年後の1907年、天因は恩師の重野安禪を伴って武漢から上海まで下るという片道の船旅もありました。当時、重野は帝国学士院幹事として、菊池大麓院長とともに学士院を代表してウィーンで開かれた万国学士院連合会第三回総会に出席しました。行きは海船ですが、帰りは数年前に相次いで竣工したシベリア鉄道、東清鉄道、蘆漢鉄道(北京付近の蘆溝橋—武漢)などを走る列車をタイミングよく利用できました。

天因はわざわざ大阪から満州南部の奉天（今の瀋陽）に出かけて恩師を迎え、その後はずっと同伴し、武漢では張之洞と再会しました。当時の張之洞は一地方大臣の湖広総督だけでなく、中央政府の文部大臣にあたる職務も兼任していました。重野がちょうど張之洞より10歳上なので、中国の伝統的な最高学術機関である翰林院も日本の帝国学士院と同じように、万国学士院連合会に加盟されたらどうかと提言しました。天因も会見の場に居合わせたため、当時の張之洞が首を縦にして賛意を表したことを目撃しました。残念ながら、張之洞は2年後の1909年に亡くなったので、翰林院の万国学士院連合会加盟はついに実現しませんでした。

天因は張之洞のほか、李鴻章（図1）と劉坤一（図2）

という2人の有力大臣とも重要な交渉関係を持ちました。李鴻章は日本の伊藤博文にあたる清朝の名臣と言えますが、日清戦争後期の1895年春に全權大臣として下関にやってきて、伊藤と停戦、賠償条件に関する談判に臨みました。交渉途中、暴徒小山豊太郎がピストルで李鴻章を狙撃し、その顔面の左側の顚骨に重傷を負わせたという突発事件がありました。当時、下関に駆けつけて取材中の日本の新聞社が30社あり、漢文が達者な大阪朝日新聞の天因が推されて30社連署の「新聞記者の慰問書」を漢文で書き、それに60羽の鶏をつけて李氏一行に呈上しました。心を慰める「慰問書」と傷を養うための栄養補充がいずれも不可欠だと考えられていたようでした。

劉坤一は太平天国の乱を鎮定した曾国藩の部下であったばかりでなく、西太后の厚い信頼も受けていたため、南京に官邸を構える「两江總督」（江蘇省、浙江省と安徽省を管轄）という要職を与えられました。1900年義和団の乱が蔓延していたなかで、朝日新聞社の派遣留学で清国に渡った天因が、4月2日、6月5日、そして翌1901年の6月28日と三回にわたり劉氏を訪ね、徳育・知育・体育の在り方を刷新する近代的教育改革により新しいタイプの人材を育成する建白を行いました。

幸いに私は懷徳堂文庫の中に、その建白書の下書きを見つけたので、その詳細を論じることができました。1900年6月5日の会見の様子に関する報道文「南京來書」（朝日新聞掲載）において、西太后と諸外国の対抗など難儀な時局を語り合う際の劉氏が思わず泣き出して、「ほとんど客と相対するのを忘れるものごとし」と天因が紹介しています。ここの「客」はいうまでもなく天因自身を指します



図1 負傷後の李鴻章（下関にて）、関西大学図書館増田文庫蔵『下関春帆樓に於ける両雄の会見』2版（大園市蔵編、堀川泰弘発行、1926年）



図2 劉坤一

が、両者の心が通じ合っていたことがよく分かります。したがって、劉氏が情熱をこめて「日本の名士西村天因に贈る」と題する漢詩（いわゆる「五律」二首、全16句）を書き、そのなかで、天因のことを古代中国の遊説上手、論策上手の有名人と並ぶ義理を重んじる「名士」と讃えました。

（湯浅）

補足も含めてどうもありがとうございます。陶先生の今のエピソードの中に当時の外国人、清国人に対する慈愛の気持ちや行動というのがあったわけですが、そういう言葉や行動が、単なる過去の出来事ではなくて、今の私たちあるいはこれからの日本社会に何か重要なものがあるんじゃないかなという気がずっとしているんですね、私自身。町先生どうですかそのあたりいかがでしょうか。

模範にすべき天因の視野と見識

（町）

今、陶先生からもお話がありましたけれども、西村がいろいろな中国の政治家や要人と深い繋がりを持っていたという点は、我々やはり考えるべきことだと思うんですね。これは西村だけに限ったことではないですが、当時の中国学者・中国古典研究者の中には、^{かくとうこくぶん}内藤湖南にしても鈴木虎雄にしても新聞記者出身の人たちが結構います。彼らにとって新聞記者としての経験は、世界を見る目、現代社会を見る目というようなものを培う点で大きな意味があったと思います。それは一方では日本の対外侵出に協力したというような負の側面もあるかもしれないし、そういう点が戦後長く忌避されてきた面もあったと思います。しかしその時代から戦後80年が経とうとしており、西村の場合であれば戦後100年という時間が経過して、良い面悪い面あったかもしれないけれども、ここらでもう一度過去をきちっと検証することが必要なのではないかと私は思います。

ひるがえって、私たちのような中国関係の人文学分野に所属する研究者が置かれている状況について考えてみると、西村天因らの世代の人たちが持っていたような当時の社会に対する影響力を、現在我々はほとんど持ち合わせません。昔の西村天因や内藤湖南のような人々に比べて、いま我々は研究費がない後継者がいないといったことばかり、日本中大概どこでも国立も私立も関係なく、そんなことを言っているわけです。そういう現状と対比して、西村天因は中国研究とか中国古典研究とかがパワーがあった時代を我々に思い起こさせる存在であると言えるように思います。

私が言いたいのは、決して昔のことを回顧することばかりではありません。つい数日前も今月中に中国にビザなし渡航できるようになるというニュースが飛び込んできましたが、現在も日中関係・国際関係は時々刻々変わっていくわけですね。そして常に東アジアの近隣諸国との関係は大事なわけですから、時々刻々変化していく情勢の中にあって、やっぱり公平公正な目でちゃんと見て判断していけるような識見とか人脈とか、そういうものを我々はきちんと培っていく必要があるということ、天因さんみたいな人のことを調べるにつけて思うわけです。そういうことが、私としてはいま

我々が西村天因から学ぶべきことではないかと思えます。

(湯浅)

とても貴重なお話をありがとうございました。我々研究者っていうのは、本当に厳しい状況に置かれていて、研究費もない、給料も安い、旅費も出ない、そういう中でギリギリの仕事をしてるわけですけども、じゃあお前たちは、高い見識を持って日本社会にどれだけ貢献しているんだと言われると、急に声小さくなっちゃうんですね。研究室に閉じこもって本読んで論文を書いているだけが研究ではない。やはり天因が生きていた時代のジャーナリストや漢学者が持っていた高い見識、広い視野、そういうのを、私たちは持っていかないといけないんじゃないかということですね。ありがとうございました。

郷里を知ることの大切さ

(湯浅)

それでは、残念ながら時間になってしましまして、4名の先生方にそれぞれのご自身の関心からお話をいただきました。細部や小さな点ではご理解の及ばなかった点もあると思えますけども、大きく言えば、天因という人がいかに巨人であったか。体格だけじゃなくて、学問、見識、人間性っていうのが偉大であったかってことがわかり、かつ、いろんな角度からまだまだ検証したり研究したりする余地があるということがご理解いただけたと思います。これは私たち研究者だけが頑張っても仕方がない。やはり郷里の皆さんが、そういう気持ちを持って、次の100年に向けて何かを始めなければいけないと思うんですね。

まとめの言葉になるかどうかわかりませんが、最後に一つ、皆さんに馴染みの深い人の言葉を紹介します。それは、この隣の市役所の前庭にある最上宏（最上ひろみ）さんの言葉です。

最上さんというのは、初代の西之表町長です。胸から上の胸像が前庭に立っていますね。この最上さんも天因を頼って、大阪に出て、天因からいろいろと支援を受けた人なんですよ。最上さんのほかに、当時朝日で活躍していた天因さんを頼ってですね、種子島の若い人たちが大阪に出ることが結構あったらしいんですね。そのときに天因さんはシナ料理店、当時はシナと言いましたけども、中華料理店に連れて行ってごちそうをするのが通例だったそうです。

ただそのときに、最上さんの証言によると、天因さんはその若い人たちに向かってこういふに言った。それは、「種子島出身だということを隠してはならない」。つまり、当時の若者というのは自分が田舎の出身だということを都会で言いたくないんです。これは私が島根県出雲の出身なんでよくわかります。都会に出ている田舎者だと悟られるのが嫌だから黙ってしまう、あるいは意図的に隠すということが若いときにはあるんです。その気持ちはわかります。しかし天因さんは、そういう若い人たちをたしなめて、「種子島出身だということをお前たちは隠してはいけない、種子島出身だという

ことを隠すのは種子島の良さを知らないからだ」と言っていたそうなんです。

これですね、郷土愛。自分たちの郷里をもう1回振り返ってみましょう。そこに歴史も文化もなければそこは仕方ないですよ。しかし、種子島にはあるんです。縄文弥生時代の遺蹟から、鉄砲伝来から、宇宙センターに至るまで豊かな文化がある。それを皆さんがもう一度自覚して、そして明日に向かって、「温故知新」ではありませんが、古いものを大切に温めて次の新しい時代に向けて何か行動を起こすということが大切じゃないかなと思うんですね。

その取りかかりの1人になるのが西村天因という大先生であって、そして私たち研究者も微力ではありますがけれども、そのお手伝いを今後もさせていただきたいと思っておりますので、どうかよろしく願いたします。

本日パネリストを進めていただきました陶先生、竹田先生、町先生、六車さんにもう一度拍手をお願いいたします。それでは以上をもちまして西村天因没後100年記念の講演会並びにシンポジウムを閉じさせていただきます。本日はご来場どうもありがとうございました。



令和6年

日時: 11月23日 土 13:30
16:30

場所: 西之表市民会館 ホール

入場無料・予約不要



種子島出身の西村天囚は「天声人語」の名付け親としても知られる漢学者・ジャーナリストです。その没後100年を記念するシンポジウムを開催しますので、是非ご来場下さい。

西村天囚

没後一〇〇〇年記念

シンポジウム



【第1部】講演

『漢学者西村天囚と横綱西ノ海
二人をつないだ「孝」の思い』

大正5年(1916)、西ノ海の横綱昇進を機に、天囚は相撲の歴史を振り返り、西ノ海を顕彰する碑文を作成しています。その内容を読み解きながら、二人をつないだ「孝」の思いに迫ってみましょう。

湯浅 邦弘 氏 (大阪大学 名誉教授)

【第2部】パネルディスカッション

テーマ「西村天囚を語ろう 一次の100年のために」

西村天囚の生涯と業績について、中国思想、日本漢学、日中文化交流史、懷徳堂研究などさまざまな角度から語り、種子島や西村天囚の魅力をどのように発信していけばよいか考えます。(司会:湯浅 邦弘)



陶 徳民 氏
(関西大学 名誉教授)



竹田 健二 氏
(高根大学 教授)



町 泉寿郎 氏
(二松学舎大学 教授)



六車 楓 氏
(立命館大学 専門研究員)

西村天囚が撰文した石碑の解説小冊子も刊行しました。詳しくは右のQRコードより西之表市ホームページをご確認ください。



問い合わせ先

西之表市企画課歴史文化活用係

☎0997-22-1111 (内線280)

西村天囚没後100年記念シンポジウム

開催日: 令和6年11月23日(土) 13:30~16:30

場所: 西之表市民会館ホール

「天声人語」の名付け親として知られる西村天囚は慶応元年(1865)、種子島の生まれ。東京大学古典講習科に学んだ後、その漢文力を活かして大阪朝日新聞で活躍した漢学者・ジャーナリストです。当時の同僚には、夏目漱石、内藤湖南などがいました。

今年は西村天囚の没後100年。この記念シンポジウムでは、天囚の歴史的意義を多様な角度から考えます。



【第1部】講演

漢学者西村天囚と横綱西ノ海 二人をつないだ「孝」の思い

種子島出身で現在唯一の横綱である西ノ海と明治・大正時代を代表する漢学者西村天囚には親交がありました。大正5年(1916)、西ノ海の横綱昇進を機に、天囚は相撲の歴史を振り返り、西ノ海を顕彰する碑文を作成しています。その内容を読み解きながら、二人をつないだ「孝」の思いに迫ってみましょう。

★講師紹介★



ゆあさ くにひろ
湯浅 邦弘

(大阪大学名誉教授)

1957年、島根県出雲市生まれ。大阪大学大学院修了。博士(文学)。現在、大阪大学名誉教授。専門は中国思想史。西村天囚の旧蔵書「碩園記念文庫」が大阪大学図書館に收藏されていることから、天囚の思想に関心を抱き、ここ8年ほどは種子島での文化財調査を実施している。

島民の皆様からあたたかいご支援を賜り、天囚の世界一周旅行をたどった『世界は縮まれり—西村天囚『欧米遊覧記』を読む—』(KADOKAWA)を刊行。また本年9月には、西村天囚の生涯と業績をたどる『近代人文学の形成』(汲古書院)を刊行予定。

その他、『中国古典の生かし方—仕事と人生の質を高める60の名言』(NHK出版新書)、『諸子百家』『菜根譚』(中公新書)、『孫子・三十六計』『貞観政要』『荀子』(角川ソフィア文庫)、『入門 老荘思想』『軍国日本と『孫子』』(ちくま新書)、『概説中国思想史』『中国思想基本用語集』(編著、ミネルヴァ書房)など著書多数。

第1回大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門)(2011年)、「中文デジタル・パブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会」の「優秀学術論文賞」(2013年)。

【第2部】パネルディスカッション 「西村天囚を語ろう -次の100年のために-」

西村天囚の生涯と業績について、中国思想、日本漢学、日中文化交渉史、懐徳堂研究などさまざまな角度から語ります。この記念事業を基に次の100年に向けて種子島や西村天囚の魅力をどのように発信していったらよいか考えてみましょう。

★パネラー紹介★



とう とくみん

陶 徳民 (関西大学 名誉教授)

中国上海生まれ、日本在住35年。大阪大学留学の1980年代後期から懐徳堂の研究を始め、西村天囚とその恩師重野安綱や親友内藤湖南のことも研究している。東アジア文化交渉学会初代会長。著書に『明治の漢学者と中国』など。



たけだ けんじ

竹田 健二 (島根大学 教授)

島根県出身。2017年以降、種子島の西村天囚関係資料の調査を行い、今回の訪問が15回目。明治末から大正にかけての懐徳堂顕彰運動の展開について研究中。著書に『市民大学の誕生』『懐徳堂研究』など。



まち せんじゅうろう

町 泉寿郎 (二松学舎大学 教授)

北里研究所東洋医学総合研究所研究員を経て、2003年より二松学舎大学で教鞭をとる。専門は、日本漢学・日本医学史。西村天囚が学んだ東京大学古典講習科について関心があり、現在、天囚の日記や書簡を解読している。著書に『漢学と漢学塾(講座 近代日本と漢学2)』など。



むぐるま かえで

六車 楓 (立命館大学 専門研究員)

大阪大学大学院生の時から懐徳堂および西村天囚関連資料を読み始め、昨年度から種子島での資料調査に加わり、天囚の文章観について調査している。懐徳堂に関わる著書に『儒教の名句』上下巻など。

漢学者西村天囚と横綱西ノ海

二人をつないだ「孝」の思い

西村天囚没後一〇〇年記念シンポジウム講演

令和六年（二〇二四）十一月二十三日

大阪大学名誉教授 湯浅邦弘



種子島出身の漢学者「西村天囚」と横綱「西ノ海」の交流を、天囚が執筆した碑文に読み解く。二人をつないだ熱き思いとは何だったのか。

- 慶応元年（一八六五） 西村天囚生まれる（名は時彦、別号に碩園）。
- 明治十三年（一八八〇） 牧瀬休八（後の横綱西ノ海）生まれる。
- 明治十六年（一八八三） 西村天囚、東京大学古典講習科入学。
- 明治二十三年（一八九〇） 西村天囚、大阪朝日新聞社編集局員となる。
- 大正五年（二九一六） 西ノ海、横綱に昇進。大阪学問所「横徳堂」再建。
- 大正六年（二九一七） 西村天囚、西ノ海顕彰の碑文を作成。



第二十五代横綱西ノ海土俵入り

大正八年（一九一九）一月二十七日
九段相撲場（靖国神社）

大刀持ちは第二十六代横綱の大錦
霧払い第二十七代横綱の板木山

西村天囚「力士西海報恩碑」文

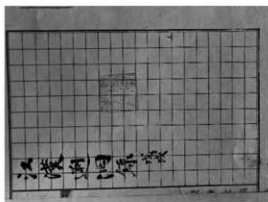
「怪力は得易く孝は得難し」

（写真提供：西村貞則氏）

パネルディスカッション「西村天因を語ろうー次の100年のためにー」

(司会：湯淺邦弘) 陶徳民・竹田健二・町泉寿郎・六車楓

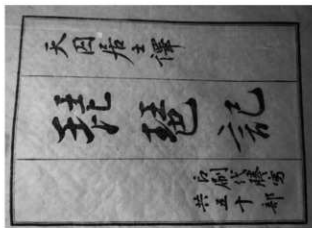
- 【1】『江漢朔洞録』（1898）
- 【2】天因に贈った張之洞の書・録司馬公（注書）（1898）



- 【3】三省堂出版の初の『漢和大字典』（1903）



- 【4】訳本『琵琶記』（1913）



- 【5】『楚辭要纂叢刊』（2020）



【6】修復前の『懷徳堂考之一』



【7】修復後の『懷徳堂考之一』



【8】竹簡（一部） 出典：津島太政蔵國竹簡



【9】『論語』（横浜国立大学附属図書館所蔵） 出典：国書データベース <https://doi.org/10.20730/100339225>



【10】西村天因「評點學」

